
ええ～めんどくさい

マエダルマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ええ〜めんどくさい

【Nコード】

N8017X

【作者名】

マエダルマ

【あらすじ】

めんどくさがりの主人公に起こる様々な出来事を解決していく話です。バトルや笑いなどの要素もあり、主人公最強ものです。

プロローグ

俺の名前は見中 央太。

俺のいる世界では魔法が当たり前に存在している。まあ、もちろん使えない人もいない訳ではない。使えたとしても、魔法は属性魔法と無属性魔法があり、属性魔法は一人一種類しか使えず、魔法は火、水、電気、風、土、草、召喚術の7つある内のどれかである。俺はまあ、いろいろだな、うん。そして無属性魔法は誰でも使えるものである。

俺は今、日本にいくつかある魔法学校の、第9魔法学園の一年生である。

まあ、軽い気持ちで入ってしまったのだが、俺の予想とは異なる生活が待っていた。

学園へいじゅう？

「ふあゝあ」

大きな欠伸しながら俺の目は覚めた。只今、午前6時である。

いつもは、こんなに早く起きないのだが、今日は入学式ということもあって、姉貴が早く起こしたのだ。

ふと、横に違和感を感じて見てみると、女の子が一人俺のベッドで気持ち良さそうに寝ている。

その女の子は、水色の髪を腰まで伸ばしていて、顔は百人中百人が振り向く程の美少女だ。

俺が起きたことを感じ取ったのか、その子も体を起こして、

「お兄ちゃん、おはよう。」

と、俺にいった。

「また、お前忍び込んだのか？」

と聞くと、

「何言ってるの？お兄ちゃん。私とお兄ちゃんは一心同体なんだから同じベッドで寝るのは、当たり前じゃない。」

といきなり頭の痛い発言をしてきた。
まあ、いつものことなので気にせず朝食の用意がされているであろうリビングに降りていった。

ちなみにさっきの女の子は俺の妹である見^{みな}中^{なか} 真^{まこと}という子でちよつ

とした、いや、かなりのブラコンである。年は俺と同一年だが双子という訳ではない。そして、俺には、姉貴^{あね}がいて、彼女の名前は見^{みな}

中^{なか} 栗^{しずく}

真と同じように水色の髪をもつかなりの美人であるのだが・・・

「央君おはよう！」と言いながら、いきなり抱きついてきた。

そう、この人もここが問題なのだ。真と同じ、かなりのブラコンで

ある。

やれやれと思いつながら、姉貴をはがして席につき朝食を食べ始めた。ちなみに俺の両親は今、海外へ赴任中で俺たち三人しかいない。と思っている内に姉貴が俺の方をみてニヤニヤしていることに気付いた。あまりにも気持ち悪かったので理由を聞いてみると、

「だって、これから毎日、央君と一緒に学園まで行けるじゃない。」

といつてきた。俺ははいはい、そうですねと軽く受け流し、食べ終わったので皿を片付けようとしていたら、姉貴が俺を呼び止めた。いったいどうしたのだろう？と思つて振り返ると、

「ご飯粒ついてるよ」といつて、俺の頬についたご飯粒をとつてそのまま口に持つていきそれを食べた。まじかよ。

普通ここまでするか？おつと、うちは普通じゃないんだつた。でもなんとなく恥ずかしかつたので、ちらりと姉貴の方を見てみると、姉貴は嬉しそうにニコニコしていた。だが、急に殺気を感じたのでそちらの方を見てみると、俺の後ろで手を握りしめたまま真が震えながら立つていた。そして次の瞬間、

「お姉ちゃん、ずるい。お兄ちゃんについたご飯粒食べるなんて！そんなことするなら、私はお兄ちゃんを直接なめるもん！」

いや、妹よそれは違うんじゃないか？と思つてみると、

「別にいいんじゃない？そしたら、私も思う存分できるし。」

と、姉貴が言つた。

おいおい、あんたら頭大丈夫か？もう病院行つてこいよ。とか、考えていると、

「ダメだよ。お兄ちゃんは、私の物なんだから。」
と姉貴に向かつて言つていた。もうツツコム気もねえや。

「あなたこそダメよ。央君は私の物なんだから。」

と姉貴が言い返していた。そのままお互いにらみあつたまま、真が突然手を前の方につきだして

「水よ私の刃となり切り裂け、アクア・スラッシュ」
とまさかの、呪文を唱えてきた。それは三日月型を描いて姉貴に向
かって行った。しかし、姉貴も全く同じタイミングで同じ呪文を唱
えていて、2つの魔法はぶつかり消えた。
真も姉貴ももう新しい呪文を唱えていた。姉妹喧嘩で魔法使うとか、
どんだけなんだよ。と思いながら、俺は学園にいく準備をしていた。

学園へいこう？（後書き）

ぜひ、感想をお聞かせください。

学園へいじゅう？

あの後、喧嘩していた姉貴達をめんどくさいので、無視して行こうと思つたら、俺が家を出る直前に喧嘩をやめ、準備を済まして、（ちなみに準備は俺がまばたきしている間に終わっていた。）俺の腕に抱きついてきた。二人を引き剥がすことは、めんどくさいのではない。むしろやったとしても、この二人は絶対に離れないだろう。そしてその二人は俺を挟んだままにらみあっていた。「よそでやってくれ」と思つてはいるが、もし言つたのなら、想像出来ないほどめんどくさいことになるだろう。

そんなこんなで、歩いていると、

「お〜い。央太〜」

と元気な声が聞こえて、ドン！と背中に衝撃がきた。振り向いてみると、赤い髪をショートカットにしたボーイッシュな美少女が俺の背中に抱きついていて、

彼女の名前は、

西名 炒子（にしな しょうこ）俺の幼なじみズの一人である。

「おはよう。央太」

「ああ、おはよう炒子。てゆうかさ、離れてくんない？」

「ええ〜何で？」

何でって……はあ。

俺が心の中でため息をついていると、俺にしか聞こえないような声で、

「だって、こっちの方が面白いじゃない。それに央太さえよければ私かまわないよ。」と後半の部分は姉貴達に聞こえるようにいつてきた。

こいつは、何がしたいのだろうか？姉貴達に「あなたを殺して私も死ぬ！」

的なことを言わせたいのだろうか？

「ちよつと、お兄ちゃんから離れてよ。炒子。」

「そうよ。炒子ちゃん。央君は私の物なんだから。」

いや、別に姉貴の物じゃないぞ？

「ちよつと、お姉ちゃんどさくさに紛れて、何いつてるのよ！お兄ちゃんはもう私とあんなことや、こんなことをしてるんだからね！」

お前こそ、何をいつているんだ！？俺はお前と何もやった記憶はないんだが！？何はともあれ、これ以上、天下の往来で変なこと言われたら、たまんないな。そろそろ止めるか。

「おい真、嘘ばっか・・・」

「おはようございます、央太様。」

ああ、おはよう。」

今、俺に挨拶してきたのは、イギリスにある大企業のご令嬢で、彼女の名前は

エレクティア・イーストといって、キレイ金色の髪をサイドで軽く括って、残りはそのままにしている、腰まである。彼女もかなりの美少女だ。皆はエレンと呼んでいる。

「時に央太様、私と今から、良いことしませんか？」

「いや、しねえーよ!？」

「即答ですか・・・。でもでも、私は諦めません。」

といいながら、俺に体を寄せてきた。

いや、もうそこはあきらめれば？

にしても、そろそろ離さないといけないな。

「おい、皆そろそろ離れて・・・。」

「死ぬリア充。」という声が上がから、鎌鼬と一緒に降ってきた。

俺は急いで身体強化魔法を使って俺に張り付いている奴らごと移動し、避けた。

「おい、危ねえじゃねえか！」

「黙れ、このリア充。大人しく消えろ！」

と俺に向かつて吠えているのは、薄い緑色の髪を首の中間ぐらいまで伸ばして結んでいる。こいつの名前は、神谷^{かみや} 風希^{ふうき}こいつも、俺の幼なじみズの一人である。こいつの属性魔法は風であるため、飛ぶことができる。まあこいつ、結構イケメンなんだが、性格に難があるため、残念な二枚目と呼ばれている。

「風希！お兄ちゃんに何してんのよ。」

「そうよ、風希くん。して良いことと、悪いことがあるわよ。」

「もう、これはあれですね。」

「そうだな。あれしかないな。」

「あの、皆さんあれとは何ですか？」

と風希がビビりながら聞くと、

「……決まってるじゃない（ですか）（か）死刑だよ」「……」
と言った瞬間、風希が逃げようとしたが、エレンが身体強化魔法を使い、捕まえた。（エレンは電気の属性魔法が使えて、普通は無属性魔法である、身体強化魔法も電気属性を付加すると、かなり速くなる。）

はあ、全く風希もアホだな。

「お兄ちゃん。先にいつててくれない？」

「わかった。ほどほどに……いや全力でやってやれ。」

風希がこっちを嬉しそうに見てきたので訂正したら、憎しみを込めた目で見てきたが、無視して俺は学園へ向かった。

入学式？

その後、何事もなく俺は学園についた。

学園に着くと、見た目の良く似た双子が、話かけてきた。

「おはよう、央太。」

「おはよう、央太君。」

話かけてきた双子の男の子の方の名前は、あみや 亜宮 しよつじ 召慈
女の子の方の名前は、あみや 亜宮 かんな 神流という。こいつらも、俺の幼なじみズである。

「ああ、おはよう。召慈、神流」

「今日は、残りの皆はどうした？」

「そうですよ。他の皆さんは？」

「さあ？でも、多分今頃……」

「お兄ちゃん。」

お、来たな。風希は？。」

「えっ、風希誰デスカソレ？」

「いやなんでもない。」

「なに？風希がまたやらかしたのか？」

と召慈が聞いてきたので、

「ああ。俺に向かっていきなり鎌鼬撃ってきたんだよ。そしたら、真達が怒っちゃってさ。」

「成る程な。でも、可哀想だ……いや、風希が悪いな。うん。」

でさ、風希生きてるのか？」

女性陣が鋭い目付きでこちらを見たため急に言葉を変えた召慈がこっそりと聞いてきたので、

「わかんねえ。今日は、真と姉貴が家を出る前に喧嘩していたからな。」

「そいつはまた……御愁傷様だな。」
と俺と召慈が黙祷を捧げていると、

「なあ、央太。くる途中こんなもの拾ったんだが。」
と声をかけられた。声のした方を見ると、ぼろぼろになった風
希を担いでいた。そいつは、俺の幼なじみズの一人で、名前は北波^{きたは}
圭悟^{けいご}とあって、なんつうかまあ、でかいやつだ。「うーん。まあ、
しょうがないしからな。真、キズが見えないように治してやれ。」

真は「ええ」と言っているが無視することにする。ここで話は変
わるが、真は水の属性魔法を使うことができる。水の属性魔法には、
治癒魔法が入っている。

「圭悟、そんなの拾ってこなければよかったのに。」
と炒子が言ったので、圭悟は不思議そうな顔をした。

それを見ていた、エレンが説明すると、納得したような顔になった。
(圭悟は表情の変化が分かりづらく、分かるのは俺達幼なじみズと、
エレンぐらいのものだ。)

しばらくそのまま雑談していると、

「あ、大変もう私行かないと。」

と姉貴が言ったので、俺達も会場である体育館に向かうことにした。

入学式？

体育館に着いて、しばらくすると、入学式が始まった。

ちなみにこの学園は、入学式の時点ではクラスが決まっていなかったため、自由に座ることが出来る。だから俺と幼なじみズは固まって座っていた。

そして、この入学式の後に属性魔法との相性や魔法の発動速度、魔力の保有量の三点を計測して、クラスを決めることになっている。

また、魔法には現代魔法と古代魔法がある。現代魔法は魔法補助装置（SAS）と呼ばれる機械が必要だが、呪文詠唱がなく自分の思った通りに使うことができる。SASは使う人によって、様々な形をしていて腕輪だったり、ネックレスだったりする。

次に、古代魔法は何の機械もいらぬ。しかし、呪文詠唱があり決まった魔法しか使えない。

でも現代魔法とは、比べ物ならない威力を誇っている。

そもそもSASとは、古代魔法が呪文詠唱によって魔法陣を展開するのに対し、予め作っておいた魔法陣を記録して、使用者の意志に応じて展開する装置である。それなら、古代魔法も記録させればいい。と思うかも知れないが、この世界で声とは、かなり重要な意味を持つため、言葉でいうことが大事なのである。また、魔法陣を言葉に置き換えることは不可能に近いため、古代魔法と現代魔法に別れている。魔法の発動速度は現代魔法の発動速度を表している。さて、入学式の方は始まってから結構な時間が経っていて、そのほとんどが学園長とか言う太ったオッサンの話である。もう、何でもこの人の話は長いのだろうか？早く終われよ。むしろ終われ。てゆーか、消えるこのくそ豚が！おっと、やっべ殺意が湧いてきた。俺は自分を落ち着けるために周りを見てた。すると、風希が完全に寝ていた。（風希は治癒魔法を施された後、目をさまして何とか歩けるくらいまで回復していた。）

風希の横を見てみると、圭悟がすっかり背筋を伸ばしたまま寝ていた。まあ、こいつは昔から変なところで真面目だったので別に珍しいくない。

いや、まあ珍しくないだけでおかしくはあるのだが、めんどいので起こすようなことはしない。てゆーか、もう飽きたのでフケてしまおうと思いつき、こっそりと脱出することにした。そしてドアの前まで来たとき、

「あなたどこにいくの!!」

と全国のロリコンが聞いたら悶え死ぬようなかわいい声が聞こえ、ドアが氷付けになっていた。うんざりしながら前を見ると、どっからどう見ても小学生にしか見えない女の子が壇上からこちらを見ていた。

「あなた、計測の後理事長室に来なさい。」

どうやら学園長の話は終わり、理事長の話になっていたみたいだ。しょうがないので席に戻り、そのまま入学式を受け続けた。

しかし、風希はこちらを見てニヤニヤしていたので、ドアの方に身体強化魔法を使い思いつき投げつけてやると、ドアごと氷付けになっていた。ざまーみると思っていると、幼なじみズが冷たい目で見えてきた。

その後、入学式も終わり測定が始まった。俺はやる気なんて微塵もなかったので、適当に済まして皆と喋りながら、理事長室に向かわず帰ろう。と思いついて待っている幼なじみズに手を振ろうとしたら、背中に違和感を感じた。振り向いてみると悪魔のような笑みを浮かべた理事長が背中に張り付いていた。

「さあ、行きましよう央ちゃん」

「はい。理事ちよ……いや、みぞれ雲伯母さん。」
と俺は苦笑しながら答えるのだった。

理事長室での出来事

そんなこんなで俺は今、理事長室にいる。風希と一緒に。

俺は雲伯母さんに捕まった後、取り敢えず校門にいった。校門へと進みながら、どうして理事長室に行かないといけないのか聞くと、俺が入学式をサボろうとしたかららしい。まあ、当然そんなことは分かっていたが、俺は言質が欲しかったので、そんな分かりきったことを聞いたのだ。

この言葉が意味するものは……

「よし、じゃあ行ってくるか。ほら、いくぞ風希。お前達は先に帰ってて良いぞ。」

「ちよ、何でお

「いいよ、お兄ちゃん。私達待ってるから。ねえ皆？」

「私もそれでいいですよ。」

「私もかまわないよ。」

「私もいいわよ。」

「僕も異論はないかな。」

「俺もかまわんぞ」

て、聞けよお前ら！！」

と上からエレン、炒子、神流、召慈、圭悟の順に了承の返事をする。「わかった。それじゃあ少し待っててくれ。ほら風希自分で歩け。」

「くそ、何で俺もなんだよ。」

と愚痴ってきたので、俺はさっき雲伯母さんから得た言質を使った。

「それはお前が入学式を抜け出そうとしたからだよ。」

「なあ！！それはお前が俺を放り投げたからだろ！？くそー理不尽だー」

と俺に引き摺られながらも叫んでいた。

そして、理事長室に来たのだが、霧伯母さんが風希を見た後、

「なんで風希君がいるの!？」

と若干きれながら言ってきた。俺は、

「だって、霧伯母さん

「伯母さん言うな!」

・・・霧さんが入学式を抜け出そうとしたから呼び出した。って
言ってたじゃないですか。そしたら、風希もだناと思って。」
と言つと、

「分かったわ。それじゃあ・・・。」

と言いながら机に置いてあつたベルを鳴らした。すると、体のゴツ
イお兄さん達が出てきた。

「そこにいる子をあの豚・・・じゃなかった、学園長の所に連れ
ていって反省文でも書かせときなさい。」

霧さんが命令を出すと、お兄さん達は風希を担いでいってしまった。
その時、風希は売られていく子牛のような目をしていた。さすがに、
俺でも、可哀想だな。と思つたが、自分の方が大事なので霧さんの
方を向き言い訳を始めた。

「いや、俺は別に霧さんの話を聞きたくなかった訳じゃなくて

「そんなことどうでもいいの!」

.....」

ええ〜じゃあなんで呼び出したんだよ。全くこの人は意味がわか
らない。一応俺の伯母さんにあたる人なのだが、見た目は小学生の
くせに、実年齢はぐふあ!？」

「ちよつと、いきなり殴らないでくださいよ!？」

この人はいきなり身体強化魔法をつかつて殴ってきた。しかも、誰
も反応出来ないような速度で。にしても、よく無事だった俺の首。

普通ならもげてたね。うん。

「仕方無いじゃないの。女性の年齢を勝手にばらそうとするからよ。」

え、なにこの人。人の心の中まで読めるの!?!と俺は戦慄しつつも要件を聞いた。

「じゃあ、何で呼んだんですか?」

「それは、私と央ちゃんが愛し合った

「失礼しました!」

ちよつと、待ちなさい。」

俺は全力で逃げた。身体強化魔法の発動と同時にそこにあつたものを震さんに投げつけた。何とか理事長室を抜け出した俺は、風希の所にいくことにした。階段を登ろうとしたとき、足を踏み外したのか翠色の髪をしてメガネを掛けた女の子が降ってきた。俺は仕方無くその女の子を受け止めて、抱き抱えたまま階段を登った。登りきると、女の子を下ろして先に行こうとすると、女の子が声を掛けてきた。

「あの、ありがとうございます。」

「いいよ、別に気にしなくて。」

しかし、この子改めて見ると美少女だな。おっと、急がないといけないんだった。

「あの、お名前は・・・」

「ごめん。急いであるから、また今度ね。」

え、はい。わかりました。」

「じゃあね。」

さて、風希が居るのは職員室たるな。さっき風希から居場所を伝える風が届いたし。

そして、俺は職員室のドアを開けて、

「風希、帰るぞ!」と声をかけると、待つてましたと言わんばかりに喜んでいた。そのまま、廊下側の窓から飛び出し脱出した。校門まで向かう途中震さんから、「今日のところは勘弁してあげる。」

とメールが来たので俺は安心して校門まで向かうのであった。

「わりいな、皆。待たせちまって。」
俺が息を整えながら言うと、皆、別に大丈夫だよ。的なことをいつてくれた。

そして、皆で雑談をしながら、校門を出て家に向かって歩きだした。家に向かう途中でエレンと姉貴と真と炒子が、俺と腕を誰が組むかでもめていたが、周りの視線が痛かったので、それを止めさせて、家に帰った。

クラスの差別そして決闘へ（前書き）

今回は結構ながいですよ。

そしてやっとバトルって感じですよ。

クラスの差別そして決闘へ

俺は今、家にある自分の部屋でくつろいでいる。

家に帰りついた後すぐに、姉貴と真が、準備があるから。といってまた、家から出ていった。俺は何故この時忘れていたのだろう？姉貴達は信じられないぐらいのブロンである。……

「央君、ちょっと降りてきてくれない？」

と姉貴が声をかけて来た。しかし、何かがおかしい。何時もと少し声が違うような気がする。だが、気のせいだと思いリビングへと降りていった。

リビングに着くと、いきなり、魔法が飛んできた。俺は身体強化魔法を即座に使用し回避しようとするが、何故か体が動かない。下を見てみると、属性付加した身体強化魔法を使ったエレンがいた。

俺は、戸惑いながらも攻撃から身を守る為に俺だけが使える無詠唱の古代魔法を使った。中身は古代魔法である『アクア・シールド』と変わりはない。そう、俺は例外で古代魔法を無詠唱で使えるのだ。

魔法同士がぶつかり消滅した。どうやら相手も初級魔法を使ったらしい。(ちなみに属性魔法は、初級、中級、上級、最上級の4つに分けられている。)

俺は魔法を撃つてきた相手にエレンを引き剥がしながら聞いた。

「おい真、何するんだ!？」

「お兄ちゃんがいけないんだよ。だって、お兄ちゃんから知らない女の子の匂いがするんだもん仕方無いよ。」

「えっ、何を言っているんだ?」

「だからね、皆に集まって貰ったんだ。お兄ちゃんをお仕置きするためさ。」

いや、いつている意味がわからない。俺は別に幼なじみズ以外の女の子とふれ合った記憶は・・・あーあるな。うん。しかし、たった1、2秒だぞ。匂いなんてわかんねえだろ普通さ。

しかし、愚痴ってばかりでもしょうがないのでここは、逃げることにしよう。そう思い、身体強化魔法に電気の属性を付加して、逃げようとする声かけられた。

「無駄だぞ、央太。この家には私達四人で作った結界が張っているからな」

炒子お前も来ていたのか。てかいつの間に結界なんか・・・しまった。家に帰りついて言っていた、「準備があるから」とはこれの事だったのか!

「ちっ、皆誤解だ俺は別に女の子とイチャイチャしてきたわけはない。ただ階段から落ちてきた子を助けただけだ。」

「じゃあ、今の『ちっ』でどういう意味なんだ? ああん?」

と炒子が凄んでくる。俺は、

「どうせ言ったって信じてくれないとおもったからだ。」

と本心を語ると、この場の気温が一気に下がった。しかし、すぐに暖かく、いや暑くなった。前者は姉貴と真が全力でSASに魔力を注ぎ、水の魔力が溢れだしたから。後者は、炒子とエレンの火と電気の魔力がSASから溢れ始めたから。

「お、おい皆。何でそんなに魔力を入れているんだ?」

「。。。だって央君(お兄ちゃん)(央太)(央太様)が私達の

ことを信用してくれないから、お仕置きが余計に必要でしょう？（じやない）（ですか）（だろ）「……」
あゝあ。選択肢ミスったかな？

翌日、目が覚めると俺はベッドの上にいた。横を見ると、幸せそうな顔で姉貴と真が寝ていた。

俺は二人を起こさないようにベッドを抜け出すと、洗面所へと向かった。

「あゝあ。こりゃ酷いな。」

と俺は、鏡を見ながらぼやいていた。結局あの後、現代魔法の上級魔法（現代魔法の上級魔法は古代魔法の中級魔法ほどの威力しかない。）を四方向から受けてしまい、記憶が途切れていた。

俺は気合いを入れ直し、治癒魔法をかけて顔のキズだけでも治してから朝食を作って、姉貴達が起きてくるのを待つて学園へ出掛けた。

今日、学園ではクラス発表が有るので、早い時間にも関わらず沢山の人がいた。

この学園は属性別にクラスがA〜CまであってAから順に成績のいい順に入っていく。そして、各属性で一番の成績優秀者が集められ

たSクラスがある。また、逆に各属性の成績最下位が集められたGクラスがある。

さて、Sクラスを見てみると、水属性は真、火属性は炒子、電気属性はエレン、土属性は圭悟、召喚術は神流、と言っ具合になっていた。風属性と草属性は知らない名前だった。何にしても、予想通りと言ったら予想通りなのだが風希の名前がないのが以外だな。と思っっていると、真もそう思っっているらしく、

「風希の名前何でないんだろう？」
と言っってきた。

「後で本人でも聞いてみるか。」
「そうだね。でもお兄ちゃんと同じクラスになれないのはショックだな。」

と悲しそうに言っってきた。真は霧さんに全力で計測に望むように言われていたのだ。

「良いじゃないか。俺は真がSクラスに入れて嬉しいぞ。」
と言いながら頭を撫でてやると、顔を赤くしながら、「うん。」と小さな声で答えた。

そして、俺のクラスを見てみるとなんとGクラスだったのだ。（俺は一応水のクラスで受験している。）
やっべ、めんどくさいからってちょっと適當過ぎたかなと思ってGクラスのメンバーを見てみると、風希と召慈の名前があった。おかしいな、風希はさっきいった通りSクラスに居てもおかしくないし、召慈は神流について学年次席をとるくらいの実力を持っている。まあ、考えても仕方無いので教室着いてから聞こうと思っ真と別れて教室に向かった。

教室に着くとそれは酷い有り様だった。傾いている机に、今にも壊れそうな椅子本当に教室なのか？廃材置き場じゃなくて？と言えるぐらい酷かった。

机に向かって歩いてみると、召慈と風希が喋って居るのが見えたので、机に鞆を掛けてそちらに向かった。

「おい、風希、召慈、おはよう。なあ、何でお前らGクラスなんだ？」

「僕はわざとだよ。Sクラスは神流に譲ったは良いんだけど、Aクラスで一人ぼっちてのは寂しいだろ？だから、未来視を持つ聖霊神を出して

「なあ、お前さ気軽に聖霊神出したとか言ってるけどさ、それいちお最上級魔法だろ？そんなことに使うなよ。」

大丈夫だよ。ちゃんと家で使ってきたからさ。んまあ、それで中央太がどのクラスに入るか調べてきてこのクラスに入ったんだよ。」

「まあ、いや。それで風希は？」

「あつ、俺の場合はもつと簡単だよ。まず、朝っぱらから学年いや、学園の一位を争うほどの実力者達にぼこぼこにされて、その後ドアと一緒に氷付けにされたからなあ。もう、計測を受けられただけで奇跡だぜ？」

「ああ、そう言えばそんなこともあったな。」

「いや、後者はお前のせいだからな！？」

「はっはっはっは。おつと、先生来し座るかな。」

「うん。そうした方がいいと思うよ。」

「流すのかよ……。はあ、もういいよ。早く座れ。」

「おう。」

俺は席に戻っていった。

「よし、お前ら俺がお前らの担任だ。俺はお前達みたいなゴミ共の担任なんて嫌だが、まあ俺が就いてやるんだから有り難く思うんだな。」

ガタツ

「止めろ、風希。こんなやつ相手にする価値もない。」

と俺が横にいる風希を止めていると、

「おい、そこのお前、誰が『相手にする価値もない』だ、教師に喧嘩うつてんのか？」

ちなみに、魔法学園で教師をやるには、かなりの実力者でないといけない。

はあ、全くこんなバカは何処にでも居るんだよな。まったく。

「別に先生の聞き間違いじゃないんですか？」

といつの間にか、召慈がそう答えていた。

「ああ、黙つとれこの出来損ないが。顔は似ているが、妹とは大事な部分が大違いだな。」

「先生。何を言っているんですか？いくら双子でも違うのは当たり前じゃないんですか。それに、どこ見て言っているんですか？」

と召慈が笑いを堪えながらきいた。

そう。このどうしようもないやつ（これからは、Gクラスの担任と言うことで、ゴキ先生と呼称する）は、黒板に向かって言っていたのだ。原理は簡単で、まず召慈が、聖霊を出して方向感覚を混乱させ、俺が作った水の幻影を黒板の方におく。そして、風希の風で他の生徒達に魔法が見えないようにする。（この作戦を俺達はアイコンタクトだけで理解した。これぞ、幼なじみでこそ成せる技である。）すると、ゴキ先生は、突然黒板の方を向いて罵倒し出したように

見えるのだ。

「貴様ら、教師をバカにしたただで済むと思っているのか!？」

「でも先生、僕達何もしてません。周りの人に聞いてみたらどうですか？」

まあ、他の生徒達には見えていなかったのだから、生徒達に聞いても仕方がないだろう。

「お前ら本当だろうな？嘘をついているんじゃないのか!？」

はははは、ゴキ先生が必死に生徒達に聞いてまわっていた。

『キーンコーンカンコーン』

おっと、チャイムがなったな。授業が終わって、少しの休憩にはいり、先生も一度職員室に戻る。ゴキ先生は教室を出るとき、こちらを睨みながら出ていった。

「マジ腹立つな、ゴキ先生。」

と風希が話掛けてきた。

「まったくだよ。ああいう差別思想は虫酸がはしるね。」

と召慈も話しかけてきた。

「ああ、そうだな。しかし、相手にするのもめんどくさいからな。俺はシカトを決め込む事にするよ。」

「まあ、そうだな。あんなやつとは、目をあわせるのもイヤだしな。」

「ふう〜ん。じゃあ僕はもう少し恥をかいてもらおうかな？」

「止めとけ。時間と労力の無駄だ。」

「いや〜でもさあいつ心の中まで腐ってるよ?」

「それ、どういう意味だ?」

と風希が食い付いてきた。

「僕さ、ずっと心を見ることができる聖霊を出して居たんだけどさ僕達と話している時、心の底から僕達を見下してるんだよ。それに、神流や真ちゃんのことバカにしてたし。多分たの人は、

「血縁重視主義」

そう。それだと思うよ。」

そもそも、属性魔法は、遺伝するものである。だから能力の高い人は血筋がいい人しかいないと考えている人達のことを『血縁重視主義者』という。また、こいつらは有名な血筋じゃないものはどれだけ能力が高くても認めようとせず、心の底から見下している。

「まったく。それじゃまた恥をかいてもらおうかな。」

「そうだよな。やっぱこういう奴らはとことんやってやらないとね。」

「うん。確かにそうだな。じゃあやってやるか。」

と風希が言ってきたので俺達は、

「もちろん。」

「当たり前じゃないか。」

と了承の返事をした。

キーンコーンカンコーン

「おっと、授業始まるな。」

「本当だね。じゃあ僕は席に戻るよ。」

「ああ、わかった。」

と俺が返事を返しているとちょうどゴキ先生が入ってきた。

「なあ、中央あれってさもしかしてさ、

「ああ、お前の想像通りのものだ。」
だよな。」

俺が笑いを堪えながら答えると、風希も笑いを堪えながら返してきた。ちらっと、召慈の方を見て見ると、召慈も笑いを堪えていた。

「おい、くず共これは嘘発見機だ。今からこれを使って同じ質問をする。嘘をついてるやつがいたら、そいつは退学だ。」

まったく。相変わらずバカだな。そんな俺達に通用する訳ねえじゃん。

「ほら、貴様手を出せ。」

俺は大人しく腕を出した。嘘発見機が付けられ同じ質問をされた。しかし、俺は魔力を使って脈などをコントロールしているので、まったく意味がない。(ちなみに魔力で脈などをコントロールする事はかなり難しくSクラスでも、できる人は少ないだろう。)

そのまま、ゴキ先生は最後まで回りきつた(召慈も風希も同じことをして逃れた。)が空振りに終わり呆然としていた。しかし、俺達は追い討ちをかけた。

「先生。頭おかしいんじゃないですか？」

「そうですね。先生病院いった方が良いですよ。」

「おいおい。もし老化だったらどうすんだよ？」

「あそつか。すいません、先生。やっぱ、現実を突き付けられるのはつらいですもんね。あまり気にしないで下さい。」

と風希が言つと、

「貴様ら、調子にのるなよ。」

とゴキ先生が言ってきたので、

「まあ、別に調子になんて乗ってないですけどね。」

と思った通りのことを返した。すると、ゴキ先生は黒板に自習と書きなぐって出ていった。

「はあっ、ざまーみろって感じだな。」

「そうだな。あれでもう今日のところは来ないだろう。」

「うん。それじゃ時間まで何する？」

そんなこんなで時間は、過ぎていくのだった。

そして、放課後になり(今日は1日目だったため午前で授業は終わりなのだ。)靴箱に向かうと、Sクラス組が大量の人に囲まれなが

らも既に待っていた。

「よつす。皆早かったな。」

と声をかけると周りに沢山いた男子連中を押し退けながら幼なじみズがやって来た。

「あ、お兄ちゃん。それがね、何か職員室で先生が一人すつごく怒ってるらしくて、その先生をなだめる為に、私達の担任も行っちゃったの。何かその先生、学園で三番目に強いらしくて、二番目に強い、私達の担任が行かないといけないらしくて、殆ど自習だったの。」

それを聞いた途端、俺達Gクラス組は、吹き出すのを堪えて、「へえ〜そうなんだ。」と答えた。

その時、後から、

「そんな、ゴミ共付き合わない方がいいよ。真さん」

とさつきまでSクラス組を囲んでいたイケメン達が話しかけてきた。俺達Gクラス組はそれを笑い笑いそうになった。だって言ってることがゴキ先生と一緒になんだぜ？

彼らの胸元のバッチを見て見るとAとかいてある。成る程、Aクラスの人達か。

しかし、真達はそれを聞いて、

「あんたに、お兄ちゃんの何がわかるの？もしナンパしたいならお兄ちゃん倒してからにしてください。後、真さんだなんて気安く呼ばないでください。」

おい、真、厄介なこと言うなよ。めんどくさくなる匂いがプンプンするぞ。まあ、でも怒ってくれたのは嬉しいけどさ。

「ダメですよ、真さん。それじゃあハードルが高過ぎます。せめてダメージをあたえる程度でないと可哀想ですよ？」

えっ、何でエレンまでそんなこと言ってるの？

「おいおい、エレン。それでもまだ、高いぞ。精々一発当てる程度じゃないと。」

おいおい、ニヤニヤしながらなんて爆弾投下してんだ炒子さん!?

「それもそうですね。すいません。間違えました。」

そこは肯定するなよ！？否定しないとめんどくさいことに……

「はあ！？こんなGクラスの雑魚に俺が負ける？あり得ねえな。それじゃあ、真さん、俺が勝ったら俺と付き合ってくれる？」

「はい。もう一発でも攻撃を当てるのが出来たら。」

なんでオツケーすんの？もっと自分を大事にしようぜ女の子！！

「ははっ余裕余裕。俺は水属性の学年次席だぜ？こんなゴミに負ける訳ねえじゃん。それじゃあそのお前、明日の放課後に第一闘技場こい。さっさと勝ったら何してもらおかな。」

「ちよっ、おい待てっておい……あゝあ行っちゃったよ。はあ。」

「やったね！！お兄ちゃん。これでお兄ちゃんの力を皆に見せつけることが出来るね。」

「そうですね、中央様。これはチャンスです。」

「ちようどいいんじゃない？私達もあゆうの付きまとわれて困ってるし、うん。ちようどいい。てことで頼んだよ私達のナイト様。」

くくつと笑いながら炒子が言ってくる。

「ねえ、嫌なお兄ちゃん？嫌ならいいよ。私が我慢すれば良いことだから。ぐすっ」

と泣きそうになりながら言ってくる。

あーもう、

「わあつた、わかつたよ。だから泣くな。」

「本当！やったー。ありがとう、お兄ちゃん。」

なっ、嘘泣きだと……くっそー、いつの間にこんな悪女になったんだ。昔はあんなに素直だったのに……

「やだなー。お兄ちゃん 今も十分素直じゃない」
な、なんだと。まさか俺の心の中を

「別に読んでなんかないよ？」

読んでいるだー！。くっ、流石に曩さんの姪だな。

「まあ、いいや。取り敢えず、帰るか。」
ちなみに、神流と圭悟はこのやり取りを苦笑しながら見ていた。

次の日、何事もなく学園についた。授業は苛めすぎだのか、ゴキ先生は来なかった。(ここは、最低クラスなので、先生は一人しかいない。)おかげで授業は全て自習となり、放課後の決闘までゆつくりする事ができた。まあ、ぶつちやけ、緊張はしていない。ただ昨日、姉貴に話たら、晩飯をたらふく食べさせられて少しいや、結構胸焼けがする。風希と召慈が流石に心配して、いろいろやってくれた。

そして、放課後がきた。俺は体調が良くなり欠伸を堪えながら、SAS準備して第一闘技場に向かった。

「お、良く逃げずにきたな。」
闘技場に着くと水属性の学年次席(これからは、イケメソ君と呼称する)が話しかけてきた。まあ、相手をする必要もないので無視している。

「えっ、なにもしかしてビビってんの?でも、今更遅いんだよねーくっくっく。」
何かとつもない勘違いをしているがめんどくさいので訂正はしない。すると相手は、どんどん天狗になっていく。すると真が、

「今のうちに吠えときなさい。決闘が始まれば、あなたなんて、秒殺なんだから!」
と言った。

「へえーそうなんだ。じゃあ一分以内に倒せなかったら、俺の勝

ちで良いよね？」

「当たり前じゃない！！その代わりお兄ちゃんが勝ったら二度と私達の前に現れないですよ！」

「いいぜ。なんならGクラス以下のクラス、伝説のHクラスに入ってもいいぜ。なあ皆！」

すると周りから「当たり前だ。」と言う声が聞こえてくる。

「じゃあ、決まりね。ちゃんと約束守りなさいよ。もし、破ったら退学して魔力の剥奪よ。」

「いいぜ。ここにいる皆が証人だ」

なあ、真、お前はさ、余計なことしか言えないのか？まあいいか、これであるイケメソ君が近づかなるなら。にしても、やれやれ、まためんどろな条件が増えたもんだ。

そして、いよいよ決闘が始まる。審判はSクラスの担任の先生が勤める。

「それでは、ルール確認をします。まず、央太君の勝利条件は相手が降参するか、戦闘不能になるかのどちらかになれば勝ちです。今度は……（イケメソ君）の勝利条件は、相手が降参するか、戦闘不能になるか、一回攻撃を当てるか、一分以内に倒されなければ勝……ち……つてこれおかしじゃありませんか！！何で、……（イケメソ君）の方が有利何ですか！？こんなのおかしいですよ。学年次席対Gクラスの生徒ですよ？普通、逆じゃないんですか？」

「大丈夫ですよ先生。本人が認めていますから。」とイケメソ君が言うが、

「しかし、これは……」

「大丈夫よ。むしろハンデが少ない位だわ。」

理事長がそこまで言うなら……良いでしょうそれでは、始めます。位置についてください。武器を予め作るのなら、作って下さい。」

「はい。水よ敵を貫く刃となれアクア・ランス。」

「何だ。所詮古代魔法の初級魔法じゃないか。俺は武器なんて入

りません。」

「分かりました。それでは始めます。いざ、ファイト!!!」
かけ声と同時に身体強化魔法を使用、相手は、いきなり広範囲攻撃である、現代魔法の水属性の弾丸を撃ってきた。ぶっちゃけ避ける隙間がないほどだ。普通の身体強化魔法ならだけど。俺は一瞬で電気属性を付加して、上に飛ぶ。それだけで、弾丸の範囲から脱出、そのままプレスレット型のSASに魔力を流し、空中に水で出来た足場を形成し電気属性を付加した身体強化魔法を使つたまま、足場を蹴り敵に向かって突っ込む。試合開始から、まだ3秒もたっていない。突っ込みながら、敵に水の槍をつきだした。槍は先が丸くなっているため、刺さりはしないが、電気属性が付加されているため当たれば気絶は確実だ。しかし、あっさりと気絶させてやるつもりもないため、治癒魔法を付加し、気絶しないようにする。つまり、相手はずつと電気を浴び続けるわけだ。そんな感じの攻撃を突っ込んだ勢いのまま当たった。

外野side

外野が見たのは、イケメソ君が水の魔法弾をばらまいて勝利を確信した瞬間、上からいきなり中央が降って来て、気付いた時には槍がイケメソ君の腹に突き立てられている状況だった。

中央side

腹に槍が当たつたため、そのまま作つた槍の能力を使用し、ダメージを与え続ける。多分、五秒も浴びていけば、普通の人なら気が狂うほどの電流がながれている。まあ、一応こいつらも魔法使いなので三十秒位は持つだろう。

「おい、降参するか?」

「ぎゃああああああああ」

「うるせえんだよ！」

俺は槍を強く押し付けていると、

「ストップ！試合終了よ」

と我に帰った先生が止めてきた。しかし、

「でも先生こいつまだ、降参してませんし戦闘不能でもないですよ？」

もう、既に槍を押し付けてから十秒以上経っているのにまだ降参しない。こいつ結構、根性あるな。

まあ、痛すぎて喋れないだけだろうけど。とか思いながら見ていると、未だに「ぎゃあああああ」としか言わないのでうるさいなーと思う、ちよつと電圧を上げてみようかな？と考えていると、

「央ちゃん、止めてあげなさい。」

と震さんの言葉が響いたので治癒魔法を解除して、電気を浴びせて、気絶させた。

「ーーーー（イケメソ君）戦闘不能のため、勝者は、見中 央太君です。」

俺は別に嬉しくもないので、SASを片付けて欠伸をしながら皆の下に帰った。

イケメソ君サイドにいた人達は未だに啞然としていた。まあ、しょうがないだろう。なんてたつて学年次席がGクラスの相手にあれだけの好条件なのに、二十秒かからずにやられたのだから。

俺はめんどくさいことをやっちゃまったなー。と思いながら、皆の方に歩いていった。

クラスの差別そして決闘へ（後書き）

感想をお願いします。できれば、バトルについて。

決闘後の平和な日常

「お兄ちゃん」

と第一闘技場を出て、皆の下に向かうと、真が抱きついてきた。

「まあまあじゃねえの？」

「そうですね。央太様が本気を出せば、一秒かからずに終わっただけですのに。」

「本当だな。ちよつと、遊び過ぎじゃないのか？」

「うん。まあ、でも相手を完全にボコボコにしたい、って気持ちも分かるよ。イケメソ君も心が腐ってるみたいだしさ。」

と上から、風希、エレン、炒子の順で辛口の評価をしていく。しかし、最後の召慈の言葉が不思議だったので、聞き返す。

「何でそんなこと分かるんだ？」

「決まってるじゃないか。聖霊を放ってたんだよ。心を読めるやつをさ。」

と召慈が答えると、

「あ、やつぱり？いやね、私もさつきから聖霊を感じてたのよね。だいたい予想はしてたんだけど、やつぱり召慈のだったのね。」
と神流が会話に混ぜてくる。

「ああ、そうだよ。んで、イケメソ君は心の中で真ちゃんに、

して　　する。さらには　　してから　　する。的な感じの妄想をずっとしてたんだよ。」

と召慈がいうと、神流が顔を真っ赤にしてうつむいてしまった。まあ、当然俺に抱きついてた真にも聞こえ、「お兄ちゃんが相手なら別に・・・」と、とんでもないことを呟きだした。

「まあ、確かにクス野郎だな。だったら、もう少し電流浴びせとけば良かったかな？」
「だめよ。あれ以上やったら、あの子壊れてたわよ。」

と曩さんが割り込んでくる。確かに曩さんに言われたから、攻撃を

止めたんだつたな。とか考えていると、

「ちなみに私も、さっき言ってたようなプレイは許容範囲ないだから、可能よ。」

「いや、しねえーよ!？」

「てゆーか、聞こえてたのかよ。」

「もちろん。あなたの心の声までね。」

よし、今日から無心になる練習をしよう。と俺は心に固く誓うのだった。

「まあ、無理だと思うけど。」

あー！あー！あー！もう読まないでくれー！。と俺が心の中で絶叫していると、Sクラスの担任の先生（これからこの人のことは、美人で胸もでか・・・おっほん。スタイルもいいので、サキユバスから取って、サキユ先生と呼称する）途中で信じられない程の殺気を感じながらも、ニツクネームを付けた。俺の後の方で霧さん、真、エレンが自分の胸に手を当てて、「やっぱり、大きい方が良いのかな?」とかなんとか呟いているが、気にしない。気にしたら負けだと思う。ちなみに炒子は自信があるのか、勝ち誇ったような顔をしている。

ところで、サキユ先生がこちらに来て、俺に聞いてきた。

「あなた、水属性のクラスよね?どうして、電気属性を付加した身体強化魔法が使えるの?」

おお!流石学園内において、霧さんに次ぐ実力なだけはあるな。あの一瞬で見分けるとは。

（ちなみに電流を流していた時は、電流が見えないようにしていたので、外からではイケメソ君がいきなり苦しみ始めたようにしか見えない。）

「ええ、そうですね。でも別に属性魔法が二種類使える人は、少ないだけで居るじゃないですか。」

そう。属性魔法が二種類使える人はいる。といっても、日本には指で数えられる程しかいないが。ちなみに霧さんも二種類使える。霧

さんが入学式の時に使った水の魔法は、水属性と風属性を合わせた魔法だ。この事より、曩さんが使える属性魔法は水と風属性になる。「確かにそうですが……しかし、それなら政府に申請しないのだ」

「別に申請なんてしなくても良いんですよ。俺は二種類使えると言っても、しょぼいレベルですから。」

それでも申請しないといけません。なので、登録のために親の名前を教えてください。」

と先生が言ってきたので、

「先生。俺、親いないんですよ。今の親は義理の親なんです。だから、正確な血筋なんて、分からないので登録してもま意味がありません。」と答えた。この、親の名前が必要と言うのは、血筋を調べるために使うので先に釘を指しておいた。政府は、二種類、属性魔法を使える人より、その人の血筋の方を知りたがる。理由は簡単で、その血筋の人と色々な人を結婚させて、新しい属性魔法が二種類使える人を作るためだ。（属性魔法が二種類使える人は何故か、子供が生まれにくい。）

ちなみに、俺が言っていたことは事実だ。つまり、真は義妹で姉貴は義姉にあたるのである。

サキユ先生は、

「そうだったのね。それじゃあ仕方無いわね。嫌なこと聞いてごめんなさい。」

と言ってきた。少し寂しそうに言った効果はあったかな？別に俺は何とも思っちゃいないんだが。真達の親だって本当の親だと思ってるし。はっと、気付くめっちゃ暗い雰囲気になっていた。しかし、召慈だけはニヤニヤしていた。ああ、そっか、あいつ心の読める聖霊を出してたんだっけ。まあ、それにしても、あいつよく持つよな。ああいう、特別な力を持った聖霊は一分でも続けて出すのは大変だ。って聞くぞ？それをもう三分以上だなんて、規格外過ぎるだろう。まあ、ここにいる奴等は皆、規格外なので気にしないことにする。

さて、

「おい、皆そろそろ帰ろつぜ。」

「いいよ、分かった。」

「うん。お兄ちゃん。」

「そうですね。帰りましようか。」

「じゃあ、私も帰ろつと。」

「そうね。帰ろつか。」

「ああ、早く帰ろぜ。」

「そうだな。帰るか。」と、召慈、真、エレン、炒子、神流、風希、圭悟のここにいた。幼なじみズの全員が返事をしたので、そのまま皆で雑談しながら帰った。

家について、くつろいでいると、真が寄りかかってきた。若干だが、暗い顔をしている。

俺が「どうした？」と聞くと、

「今日、疲れた？」と聞いてきた。

うーん、なんかおかしいな？他にもっと聞きたいことがあるような顔をしているのだが。まあ、とりあえず、

「いや、別に。」

と質問に答えた。ちなみに、これは事実。まだ、一昨日真達にお仕置き？という名の拷問を受けた時の方が、倍はきつかった。いや、マジで。

にしても、やはり真はまだ何か聞きたそうな顔をしている。しゃーない。少し自分で考えてみ・・・るとあった。あれしかないよな。うん。よしよし。なら俺が言うことは一つだな。「俺は親父達を本当の親だと思っっているぞ？それに、真や姉貴だって血は繋がってな

いけど、家族だと思っっているから、別に寂しくないぞ。」
と俺は本心を伝えた。すると、さっきまで暗かった真の顔は明るくなり、笑いながら、

「うん。そうだよ。私達は家族だよ！」
と嬉しいそうに抱きついてきた。

まったく、手間のかかる妹だな。とか思いながら頭を撫でてやっている姉貴が帰って来たので、二人で迎えにいった。

「お帰り、姉貴。」俺が声をかけると、（真は既に離れている。）

「ただいま、央君。」

と言って抱きついてきた。いや、抱きつかれていた、と言った方が正しいかな。あまりにも速すぎて、身体強化魔法を使ったんじゃないか？と思わせる程の速度だった。

「うーん。今日は央君エネルギーが不足しちゃって危なかったよ。」

と俺の胸板に頬を擦り付けながら言ってきた。不足だけでこうなるのだからもし、そのエネルギーが切れた時には想像も出来ないようなことになるのは間違いないだろう。

「あつ、そうだ！ねえねえ、央君。明日からさ、一緒にお昼ご飯食べようよ。」

と姉貴から、提案がきたので、

「まあ、いいよ。」俺はあまり考えることなく、了承した。

「つてな訳で今日は皆で飯食おうぜ。」

と俺は風希と召慈に提案した。二人とも、

「別にいいよ。」

「俺も構わねえよ。」
と心良く受け入れてくれた。

そんなこんなで、昼休み。(ゴキ先生は未だに学校には、来ていない。)俺達は集合場所である、屋上に向かった。屋上では既に皆集まっっていて、俺達は最後だった。ちなみにメンバーは、姉貴、真、エレン、炒子、神流、圭悟、風希、召慈、俺そして、霰さ・・・ん？って、

「何で霰さんがいるんですか!？」

「そんなに驚かなくても良いじゃない!ああ、私スツゴい傷付いたわ。これはお仕置きしかないわね。」

という言葉と同時に、周りの気温が下がり始めた。これは、霰さんが氷属性の魔法を使う合図だ。

「ちよつと、霰さん。落ち着いてください!俺が悪かったですから!」俺が必死でなだめていると、

「本当に反省してる?」

と聞いて来たのでしめた!と思い、

「はい。海よりも深く。」

と答えた。すると、

「じゃあここに座りなさい。」

と自分の隣を呼び指していった。俺が胡座をかいて座ると、霰さんが膝の上に乗ってきた。俺は、呆れながら「あんた何歳だよ」と思っている。

「うるさいわね。折角の外見なんだから上手に使わないと意味ないじゃない。」

と言ってきた。おお、すっげ。ロリ体型をこんな形で乗りきってる人がいるとは、流石霰さん。やっぱり、他の人とは発想から違うな。おっと、これは別に悪口じゃないですヨ。ホントデスヨ。

つてな具合で、楽しい昼飯の時間は、過ぎていった。

そして、午後の授業中、

「1年Gクラス、見中 央太君。至急、会議室まで、きてください。」

と放送がかかった。

「なんだ、央太。なんかやらかしたのか？」

「いや、俺は別に何かやらかした記憶はないんだけど……」

「まあ、取り敢えず行って……いや、僕らも暇だしついていくよ。」

「分かった。それじゃあ、いくか。」

そうして、俺達は教室を後にした。

決闘後の平和な日常（後書き）

次は、**またもや決闘の予定**です。でも、戦うのは・・・

再び決闘

俺、風希、召慈の三人は、会議室に向かっていた。

「なあ、中央。本当に何もしてないのか？」

「当たり前だろ？てゆうか、何かやらかしたんなら、会議室じゃなくて職員室だろ？」

「まあそうだけど、でももしかしたら、ゴキ先生のことかもよ？」
「んつ。確かにあり得るかも知れないが、何か違うような気がするんだよね。まあ、あくまでも勘なんだけどな。」

「えつ、ああ。分かった。もう帰っていいよ。そうだね。あなたが間違いでもないかも。さっき飛ばした聖霊が今帰ってきて、会議室の様子を聞いたら、中に真ちゃんが居るってさ。」

「真が？あいつは何かやらかすような奴じゃないんだけどな。」
「どうしたんだろ？と考えていると会議室に着いたのでドアを開けて入った。」

「失礼します。」と声をかけながら、入った。風希達も同じように声をかけながら入ってきた。中には、サキユ先生と真、あと見知らぬ男子生徒がいた。彼の胸元を見るとSとかいてある。成る程。Sクラスの生徒か。サキユ先生の方に視線を向けると、サキユ先生はこちらを見て、何故、風希達が居るのか分からない。というような顔をしていたので、

「心配だったから、付いてきたんです。授業は自習ですし、友情の方が大事ですから。」
と召慈が説明していた。

嘘つけ、面白がって付いてきただけの癖に。まあ、でも俺の問題じやなかったから、ちよつとは心配しているのだろう。(ちなみに、俺の心配はするだけ無駄だと言っていた。)

サキユ先生は召慈の言葉を聞いて納得したように頷き、(納得すんのかよ!)俺達に座るように促した。俺達が座ると、サキユ先生は話始めた。

「実はですね、ここにいる風属性のSクラス生徒の彼と真さんが喧嘩をしたんです。先に仕掛けたのは、彼らしいのですが、理由を話してくれないんです。真さんは「何も言いたくない。」の一点張りで、そこにいる彼は、央太君を連れてきたら、話すと言ったので呼んだんですが・・・あの話して貰えませんか?」

とサキユ先生が、風属性のSクラス生徒(これからは、彼の偉そうな顔が腹立つので、天狗君と呼称する)に話すことを促した。(ちなみに、真はいつの間にか、俺の腕に抱きついていた。)俺は真の頭をゆっくり撫でながら、天狗君の話聞いた。

「まず、友達がここにいる男の話をしていたのを聞いて、そういうえばSクラスに同じ名字の人がいたなと思い、授業中(Sクラスの生徒は授業中だけ同じ教室に集まり、授業を受ける。それ以外は、基本的に各属性のAクラスの教室にいるように言われている。)に聞いてみようと思いついたら、いきなり彼女が喧嘩を売ってきたんです。」

と天狗君が答えると、

「違います。嘘ばかり言わないでください!。本当は、私がお兄ちゃんの話をしていたら、「Gクラスのゴミ共と家族だなんて残念ですね。」って言うてきたんです。だから私が「でも、あなたなんてGクラスにいる、お兄ちゃんとその友達である風属性のGクラス生徒、召喚術のGクラス生徒にも勝てないわよ。」と言ったら、いきなり殴ってきたんです!」

成る程な。まあ確かに天狗君は自尊心が高そうだもんな。しかし、人の妹をいきなり殴るのは賛成できないな。とか考えていると、

「だって、しょうがないじゃないか！こんなゴミ共に負ける何て言われたら！だから、俺はお前らに決闘を申し込む。この女は、Gクラスのクズ三人に勝てないといった。だから三人まとめて相手してやる！」

と天狗君が喧嘩を売って来たので、妹を殴ってくれた、お礼をしよ
うかな。などと思っていると、風希が、

「いいぜ。俺が相手してやるよ。もし俺に勝てたら、他の二人と戦えばいい。」

と言つと、天狗君が、

「はあ、何言つてんだお前？お前一人なんか、秒殺してやるよ。」
と言い返してきた。

まあ、それじゃあ今回は風希に譲かと思ひ、召慈の方を見ると、召慈も頷いてきた。だから、

「サキユ先生。ということなので、明日闘技場の予約をお願いします。」

と俺が言つと、サキユ先生はやれやれと頭を振りながらため息をついていた。

そして、会議室を出ると、

「おい、風希。絶対に勝てよ。意味もなく真を殴った罪は重いからな。」

「わかってるよ。おもいつきり屈辱を味あわせてやるよ。」
まあ、風希なら本当にやってくれるだろう。さて、

「真、お前意地がわるいな。俺達三人の名前を的確にあげるなんてさ。」

「本当だよ。しかも僕ら三人まとめて相手するなんて自殺行為でしかないし。」

と召慈も賛成する。

「だって、ねえ？」と真が少しバツが悪そうにモジモジする。

「あつ、そうだ。風希さ、あの戦法を使つのか？」

と召慈が思い出したように聞くと、

「ああ、もちろんだ。あれ以上に屈辱的なことは無いだろうからな。」

と風希がにやけながら答える。

あの戦法って何だっけ？・・・あつ、

「対風属性魔法使いよのあれか！」

「んゝまあ、今は対風属性魔法使い用じゃねえけどな。」

と風希が答える。よっしゃ、ビンゴだぜ。そうか、あれ使うのか。うん。これは面白くなりそうだ。さて、真に頼みたいことが出来たので、真の方を見ると、真はまだ、あれが何なのか、考えているみたいだった。なので、昼休みにでも話そうと思い、一旦別れた。

そして、昼休みがきた。屋上に集まったみんなに、俺は今回のことを話、みんなにお願いを一つした。

「明日の放課後、闘技場に人を沢山連れてきてくれ。」

皆、不思議そうな顔をしていたが、了承してくれた。そして、この場は解散し、教室に戻る途中で、召慈が、

「あんな頼み事をするなんて、真ちゃんよりも、意地が悪いじゃないの？」

と召慈が笑いながら言ってきたので、

「そうか？」

と俺も笑いながら返した。

そして、翌日の放課後。

闘技場には、風希と天狗君が向かい合ってたっていた。今はサキユ先生がお互いの勝利条件を確認している。闘技場のスタンドは人で埋まっている。(俺達はスタンドの下にある特別席から見ている。)
今から起こるであろう出来事を思うと、思わずニヤケてしまう。召慈も同じらしく、さっきからニヤニヤしている。そんな俺達二人を、幼なじみズは冷たい目で見てきた。

おっと、決闘が始まるみたいだ。

「それではいきます。レディ、ファイト。」

とサキユ先生の慄とした声が響くと同時に相手は『風よ我が身を運ぶ羽となれ、ウィンド・フライ』としつかり、詠唱をして空に飛ぶ(ちなみに、空を飛ぶことは、風属性の魔法使いでもなかなか難しく、古代魔法の上級魔法にあたる。)

でも、これで風希の勝ちが決まった。相手はそんなことに気付かず、「お前は空も飛べない癖に決闘をしようと言うのか？流石Gクラスのカズだな。いや、飛べないのか。悪いな、Gクラスには無理な話か。」

などと、空を飛ばない風希を見て、バカにしている。幼なじみズも、「どうして空を飛ばないのか？」

と不思議に思っていたので、俺と召慈が笑いを堪えながら、

「まあ、見とけて。」

と言って、皆をなだめた。そしたら、天狗君が、

「つまんねえな。飽きたから終わらしてやるよ！」

と息巻いたが、進まない。天狗君は何度も進もうとするが、進まない。そして次の瞬間、逆さづりになっていた。(幼なじみズはそれをみた瞬間、風希が何をしているのか理解して、俺達と一緒に笑いを堪えるのに必死になった。)そして今度は、流れるように踊り始めた。天狗君は必死になって、止めようとするが、止まらず、そのダンスと表情のアンバランス差が面白く、俺と召慈はもちろん会場

のいたるところで、笑いが起きている。天狗君は顔を怒りと羞恥に歪ませながらも今度は壁にぶつかり始めた。だんだんと顔が恐怖に強張っていった。そして最後に床に向かって頭からまっすぐ可愛らしく「きゃあああああ」と悲鳴をあげながら進んでいった。（これにより、天狗君才力マ説が浮上した。）そのまま床に直撃して頭を埋めて、体をピクピクさせながら気絶した。もう、観客と俺達の笑いは止まることはなかった。

風希 side

天狗君はいきなり空へ飛んでいった。俺はここまで、すんなりと作戦通りに行き過ぎて拍子抜けしてしまった。その間に天狗君は何か言ってきたが、聞こえなかった。そろそろ始めるか。と思い、周りの空気に魔力を流し始めた。それにより、闘技場全体の空気を掌握に成功。俺はニヤケるのを我慢しながら、風が俺の意思でしか起らないように設定する。これであの天狗君は動けなくなった。それじゃあ、まずは踊って貰おうかな？

俺は上手に踊れる用に、周りの空気から風を生み出す。うん、思ったより、難しい。まあでも、もう三分くらい踊らして飽きてきたので、今度は物理的ダメージを壁にぶつける事によって与える。天狗君の顔が恐怖で強張りだったので、その顔をみんなに見せた後、床に向かって頭から落としてやる。途中で可愛いらしい悲鳴をあげていたので、ついつい笑ってしまった。

「勝者は、神谷 風希君。」

とサキユ先生が、信じられない物をみた、という顔で告げる。俺達は走って風希のもとに向かって行って、本日面白い物を見せてくれた幼なじみに、祝福の言葉を捧げた。

しばらくすると、霧さんがきて、笑いながらやり過ぎだ。と言ってきた。そして、後の処理を霧さんに任せて帰ろうとしたら、サキユ先生が走ってきた。一体どうしたんだろう?と思っている。

「風希君、あなた一体今のどうやってやったの!？」

つと、そついえば、サキユ先生は風属性の魔法使いだっただけ?そして、質問された風希は、

「やだなー、先生。俺は何もしてないじゃないですか。」

と笑って答えただけだった。

再び決闘（後書き）

今回は、日頃残念な風希が活躍しました。そのうち、召慈も活躍させようと思っています。是非、感想をお願いします。

休日？

今日は、休日だ。

俺達の通っている学園は、週休2日制なので土日は休みなのである。思い返せば、入学してからの五日間はいろいろあった。

まずは、入学式。脱走に失敗して、霧さんに捕まる。その後、身体強化魔法を使い学園内を走り回り帰宅。帰宅すると、今度は浮気の疑いをかけられ、（別に誰かと付き合っている訳ではないのだが）ポコポコにされ気絶しながら、就寝。

2日目はクラスの発表を見て驚き、先生のクズ加減を見て驚き、イケメソ君に決闘申し込まれたことに驚きと驚いてばかりの1日だった。

3日目は決闘があった。あの程度で学園次席とは、今思い出しても笑える。

一昨日は姉貴達と一緒に昼ご飯を食べ始め、授業中に呼び出しをくらいい、天狗君に決闘を申し込まれた。まあ、俺が受けた訳じゃないけど。

昨日は、風希対天狗君の勝負があり、風希の圧勝。最後に格好良く決めたあと、サキユ先生の前から立ち去る時に転んでしまって台無しになった。まったくどこまでいっても、残念なイケメンである。

いやー、思い返せば本当に濃い五日間だった。普段の俺じゃあり得ないぐらいの忙しさだった。学園に入る前は、もう凄いものだった。学校すら、サボったことが合計で3ヶ月分ぐらいにはなるだろう。

あゝあ、なつかしな。せめて、休日ぐらいゆっくりしたかったぜ。ということ、俺は今日も予定が入っている。それは・・・勉強会だ。

てな訳で、俺は今、家を掃除している。何で掃除をしているのか？ そんなの簡単だ。会場が俺の家だからだ。何故、勉強会をするのか？ それは、昨日にさかのぼらなければならぬだろう・・・。

昨日、風希が転けた後、雲さんが言ってきた。

「あつ、月曜日に筆記と、実技の試験するから。」

「・・・えつ、」「」驚いたのは、俺と召慈、そしてまだ起き上がってこない風希だけだった。

「えつ、お兄ちゃん知らなかったの？ 私達は最初の授業の時、言われたよ。」

と真が言ってきたので、

「」「最初の授業の時・・・」「」俺達三人は、思い出す。ゴキ先生が初めて来たときの事を・・・、

「あつ、俺達聞いて無いわ。」

「うん、そうだね。僕らは何も聞いてない。」

「先生なんか俺達を罵倒した後、黒板に自習って書いてどっかいたんだったもんな。」

俺、召慈、風希の順で答える。そして、

「」「てことは、俺達受けなくていいですよね。雲さん。」「」

と三人で声を合わせて聞くと、

「まあ、それじゃあしょうがないわね。・・・とでも言つと思つてるの!？」

と雲さんが乗りつつこみを入れてきた。しかし、

「あつ、でも中央ちゃんが私と愛し合ってくれるな

「喜んで試験を受けさせてもらいます。」

「・・・ちつ!」

俺が試験を受けるむねを伝えると、盛大に舌打ちをしてきたのだった。

と言うわけで試験を受けることになったのだが、いかんせん時間が無いため、みんなに教えて貰おうと思いい、勉強会を開くことにした。みんなにどこでやりたいかを聞くと、エレンと炒子が俺の家じゃないとしない。と言いだしたので俺の家ですることになった。

姉貴に相談したところ、リビングでするように言われた。

しかし、俺は今、自分の部屋の掃除をしている。リビングは一階で俺の部屋は二階。(ちなみに、姉貴達の部屋も二階にあり、一階はリビングやキッチン、洗面所などがある。)

一見、関係無さそうに見えるが、多いに関係ある。何故なら、確実にエレンや炒子が見に来るからだ。この前、この二人が来たときは、「部屋を掃除してあげます。(る)」「と二人に強制的に入られ、俺のコレクションがいくつも見付かってしまった。

あの時は本当にヤバかった。もちろん怒られたが、方向が違ったからやばかった。二人とも、

「もう、言うてくれればいつでも良かったのに……」

と言いながら、服を脱ぎ始めた。

いや、あの時は焦ったね。いやガチで。もし、あの時真が来なければ、俺の将来は決まっていたね。うん。

と言うわけで俺は今、せつせと掃除をしている訳だ。

勉強会は午後からなので、まだ二時間ぐらい余裕がある。俺は自分の部屋の掃除を終わらして、姉貴たちを手伝うために下に降りていった。

掃除が終わったが、まだ約束の時間まで一時間近くあるので、姉貴達とゆったりしようと思いい、姉貴がお茶を入れていると、ピンポン！とインターホンがなった。

「央君、今ちょっと手はなせないから、変わりに出てくれな

い？」

と言われたので、めんどくさいな〜と思いながらも、玄関までいき、ドアを開けると、小学校低学年くらいで、銀色の髪を肩まで伸ばして、先が軽く丸まっている小さな女の子が大きいバツクを持って立っていた。家を間違えたのだろうか？とりあえず、

「どうしたの？」

と聞いてみた。すると、封筒を差し出してきた。

受け取って見ると、手紙にしか見えなかった。うわっ、やっべ。嫌な予感しかしねえ。

俺の第六感が警報を鳴らしているが、とりあえず裏を見てみた。すると親父達の名前があった。

ちなみに、名前をみた瞬間俺の第六感は「諦めろ」と告げていた。恐る恐る封筒を開けると、やはり手紙が入っていた。手紙を読んでみると、

「この子のこと、よろしくな！」

と書いてあった。やっぱり？

「て、訳なんだけどどうする？」

俺は姉貴達に聞いた。

「どうするって聞かれてもねえ？」

「そうだよ。どうしようもないよ。」

と言ってくる。

「だよな。やっぱり、この子に聞いた方が早いんだけど・・・」
さつき、玄関にいた女の子は俺達の向かい側に座って居るのだが、警戒心剥き出しで睨んでくる。

しょうがないので俺は水の魔力を体から少しずつ、放出させる。

ちなみに、これにはちゃんと意味がある。人とは、自分が知らない人しかいない空間で、同じ属性の魔力を流されると、ついついその人のもとへ行ってしまふものだ。だから、俺は、全ての属性の魔力を流していく。しかし、反応しない。俺はもしやと思い、もう一つ流してみるが、これも無反応。じゃあこれは？と思い魔力を流した瞬間、その子が抱きついてきた。

俺は驚いていた。抱きつかれたことではなく、この子が反応を示した属性について。そんな、バカな！何で世界でも十人といない属性の持ち主がここにいるんだ？

しかし、ここに来たということは・・・確かにここにいた方が安全だな。親父達の判断は正しいと思う。よし、それならやることは一つだ。俺は、女の子を膝の上のせて、未だに女の子が俺に急に抱きついたことに衝撃を受けている姉貴達にいった。

「この子は、家で預かるう。」と。

休日？（後書き）

新キャラ登場です。

てやつ？とりあえず姉貴達はほつといて、

「君、名前は？」

と聞くと、

「光。(ひかり)」成る程、親父達そのまんまつけたな。まあ、
どうでもいいんだけどな。

「よし、光。これからよろしくな！」

「うん。よろしくね。えくと・・・」

「あつ、俺は名前は央太って言っただ。」

うん。分かった。央太お兄ちゃん。」

と俺と光が微笑ましく挨拶していると、

ピンポンとインターホンがなり、

「おい。央太、風希だ。皆も居るから開けてれ！」と声がした。

あー、そういえば、今から勉強会するんだっただけ？

「と言うわけで、今日から家に住むことになった、光だ。ほら、
皆に挨拶しろ。」

俺は、俺の後に隠れていた光を前へ押し出した。

「あつあの、ひひ光って言います。よよよよろしくお願いしま
す。」

と顔を真っ赤にしながら言つと、風希が鼻息を荒くしながら、「俺
ん家に来ない？」と言つて、女子連中にボコボコにされていた。他
の人の反応は、「ふん」とか、「へえ」、「そうですか」的な
感じで、まとめると「別にいいんじゃない」的なものだった。

まあ、そんなこんなで、皆で円形のテーブルをかこむようにして、
勉強会が始まったのだが、光が俺の膝にのったままで、降りようと
しない。「どうしたもんかな〜。」と思っていると、横にいたエレ

ンが（ちなみに俺から、時計回りにエレン、炒子、風希、圭悟、召慈、神流、真、姉貴の順に座っている）しびれを切らしたのか、光に、

「降りてあげないと、央太様がかわいそうですよ？」

と言った。しかし、光は、

「いやっ！おばさんは黙っとして！！」

と言い返した。あれ？こんなこと言う子じゃなかったんだけど・・・そんな俺と離れるのがいやなのか？そんなことを考えながらエレンを見ると、エレンは、

「おぼっ・・・」

と言ったまま固まっていた。しかし、いくらなんでもなつきすぎじゃないだろうか？と思い、聞いてみると、

「あっちにいる時に、おじちゃんとおばちゃんに、『光ちゃんと同じ魔力を流している人がいるはずだよ。その人は光ちゃんの味方だからめいっぴい甘えなさい。』って言ったのだからね央太お兄ちゃんにはいっぴい甘えることにしたの。」

と、えへへへ。と笑いながら告げてくる。うん、良いね。マジ和む。

「貴方ね、言っつていいことと、悪いことが有りますわよ！！」

といつのまにか、復活していた、エレンが怒りながら言った。しかし光は無視していた。仕方無いので俺が、エレンの頭を撫でながらなだめると、（真、姉貴、炒子が羨ましそうにみてきたが、俺は気付かない振りをした。）猫のように目を細めて嬉しそうに座り直した。

結局のところ、光がどかないまま、勉強会は進んでいった。

気が付けば、外は暗くなっていたので、姉貴が皆に晩御飯を食べて

いく事を勧めると、全員が賛成した。そして、今、女子連中は、皆で晩御飯の準備をしている。実はこの中で一番料理が上手いのは、圭悟なのだが、圭悟が料理を作るとプライドが崩壊する。といつてきたので、女子連中だけで作る事になったのだ。俺はその間に、光にいろいろな事を聞いていた。例えば、好きな食べ物や事、やりたいたい事など。(ちなみに答えは、好きな食べ物は野菜全般らしく、好きな事は俺の膝に座る事、やりたい事は俺と結婚することらしい。いつのまにこんなになついたのでだろうか？会ってからまだ1日も経ってないのに。)そして俺は、最後に一番大事な質問をした。それは、光は、どのくらい属性魔法を使えるかということだ。俺が質問すると、光は、

「現代魔法とか言うやつが一番強いやつまでなら使えるって、おじちゃん達は言ってたと思う。」

と一生懸命思い出しながら、教えてくれた。ああ。かわいいすぎたな。うん。

って俺さつきからこればっかり思っていないか!? まあ、それは置いて。しかし、この年でそこまで使えるのら大したものだ。俺は「凄いな」と言いながら、光の頭を撫でていると、後から、

「私達が準備している時にイチャイチャしてんじゃないわよ!」
という、炒子の怒声と共に皿が飛んできた。俺は手で受け流し、右斜め前にいた風希に当たるように進路を変え、炒子の方を振り返り、

「こんな小さい子に嫉妬か？」
と聞いた。(後で風希の悲鳴が聞こえたが無視。)すると、どもりながら、

「べべ別に、そそそんなんじゃないし。」
と答えた。まったく、いつもはもっと大胆に迫ってくる癖にさ。ちなみにこれが炒子の弱点だ。まあ、ようするに、不意打ちに弱いのだ。もし、こう思わせる事が炒子の策略だったなら、俺は一生自分を信用出来なくなることだろう。そんなことを考えていると、姉貴達がキッチンから料理を運んできた。うーん。どれも旨そうだな。

俺達は皆がもとの位置に座るのを待って、仲良く晩御飯を食べ始めた。しばらく食べていると、光が（まだ俺の膝の上に座っている。）俺に向かって、

「 央太お兄ちゃん。あ〜ん。」

と行って、食べ物を掬ったスプーンをこちらに近付けてきた。俺は、苦笑しつつもだべようとすると、いきなりスプーンの上に有った食べ物に燃えて灰になった。俺は驚いて光を見ると、光も、

「 うわっ！！！」

と行って驚いていた。しかし、燃えたということは、誰かが火の魔法を使ったことになる。そしてこの中で火の魔法を使うのは、一人しかない。炒子だ。そう思い、炒子の方を見ると、俺に向かってスプーンを突きだして、

「 あ〜ん。」

とニヤニヤしながら近付いて来た。やっぱり、犯人はこいつか。と断定していると、光がもう一度、

「 あ〜ん！！！」

と行って、スプーンを突きだして来た。しかし、また燃えた。炒子の方を見ると、「 人生そんなに思い通りにはいかねえ〜んだよ。 」的な事を言いたそうな顔をしていた。そして、そのまま、炒子の持ったスプーンが俺のもとへたどり着いた。光には悪いが、食べないと、俺が酷い目に遭いそうなので、食べてみると、意外に美味しかった。俺が、

「 美味しい！！！」

と正直に答えると、

「 だろ！？これ私を作ったんたぜ？」

と顔を嬉しそうにほころばせて、言ってきた。まあ、こんな顔を見ていると、すっごく可愛く見える。まあ、もともと顔は良いのだが、しかし、これがギャップ萌えと言っただろうか？そんなことを考えていると、

「 あ〜ん！！！」

と光がもう一度めげずに言って来た。しかし、また燃えた。俺がため息をつきながら炒子を見ると、首を横にふって、自分じゃないと示してきた。それなら、いったい誰がやったのだろう？と考えてみると、スプーンが視界に入ってきて来て、

「あ〜ん。」

という声が聞こえてきた。声のした方を見ると、エレンがスプーンを突きだしていた。成る程。電気の発する熱で燃やしたわけか。そう考えながら、スプーンの上に有った食べ物を食べた。

「おっ！こつちも美味しいな！」

と正直に感想を伝えると、エレンは、

「喜んでもらえてよかったです。」

と照れながら言って来た。この様子だとこれは、エレンが作ったのだろう。しかし恥ずかしそうにもじもじしているエレンもまた、かわいいな〜。とか、思っていると、

「うわ〜ん。」

と光が泣き出した。まったくお前らがいじめすぎだ。という意味を込めた視線を送ると、エレンと炒子はバツが悪そうに少し笑った。はあ。と俺がため息をつきながら、光を慰めようと、光を撫でた。そしたら、1、2分ぐらいそれを続けていると、落ち着いてきて、もう一度、

「あ〜ん。」

とスプーンを突きだしていつてきた。今度は邪魔されずに俺のもとへ無事に届いた。俺はそれを食べて、

「ありがとな、光。」

と言いながら、光の頭を撫でてやった。すると、嬉しそうに笑いながら、自分の分を食べ始めた。そのまま、食事が終わると思っていたが、真と姉貴が、

「「あ〜ん。」」

と二人同時に言ってスプーンを突きだして来た。う〜ん、これはめんどくさい事になった。何故なら、どちらかを先に食べると、食べ

られなかった方が怒るからだ。さて、どうしたものかと思っていると、一つ、いい案が浮かんだ。

「おい、風希頼んだ。」

「えっ、何をだよ？」

と風希が聞いてきたので、俺は言葉をのせた風を送った。すると風希は、

「俺の命の保証は？」

と風に乗せて聞いてきた。だから俺は、

「そんなの、あるわけねえーじゃん。」

と風に乗せて（ちなみに、風に言葉をのせるのはちょっとした風の属性魔法の応用だ。）答えてやると、

「ふざけんな!!!」

と叫んだ。いきなり叫んだ風希の声にビックリしたのか、風希が叫んだ拍子に、スプーンの上に有った食べ物を落としてしまった。そして、静寂が訪れた。誰も何も言わないし、しない。その様子はさながら、時が止まっているようだった。俺はその時、

「もう、風希には会えないのかな？」

と姉貴と真以外皆が考えているだろうと思われる事を考えていた。しかし、事態は俺の予想とは違う方に進んでいった。

「「あゝん。」」

と姉貴達がリトライしてきた。俺的には、あのまま風希に構って欲しかった方が楽だな。と思っていたので、まったくどこまで行っても使えないやつである。風希を見ると、風の属性魔法を使ってテーブルの上を掃除していた。まるで、何も落ちたことはなかった。でも思わせるほどの表情をしていた。さて、姉貴達の方は凄かった。二人とも決して、一度では同時に食べられないように距離をとってスプーンを近付けてきた。その表情は、

「どちらか、一方を食べなさい。」

と言いたそうな、表情だった。そして、

「私の弁当を選ばなかったら、覚えておきなさい。」

という表情も追加してきた。うん、やばいな。これ。誰かに助けを求めようとするが、皆必ず目を背ける。くそ、皆俺を見捨てるのか？

結局、俺は当初の計画通り風魔法を使って食べた。（さつき、風希に頼んだ理由は、めんどくさかったからだ。）姉貴達は不満そうにしていたが、俺が「あ〜ん」とやり返すと落ち着いた。

気が付けば、日は完全に落ちていた。もう暗いので、女子連中を送って行くことになった。でも、この女子連中を襲うというのはただの自殺行為でしかない。そんなことをすれば、酷い目に遭うだろう。てゆーか、こいつらに勝てるのは日本中探しても百人居ないだろう。まあ、そんな最強な女子連中を送って行くことになったのは、本人達の強い要望のためだ。

そんなわけで、俺は今、炒子、エレン、神流と一緒にいた。風希、召慈、圭悟は学園の寮に住んでいるので、三人で帰っていった。（風希と召慈はGクラスに入ったため家から追い出された。圭悟は親から自立しないとイケない。といって自分から寮に入った。）そして、しばらく歩いていると、最初に炒子の家についた。まあ、いつ見てもこいつの家は凄い。だって学校みたいな家なんだぜ？（もう少し詳しくゆくと、完全な左右対象で、教室一つに大きな窓がついて、見た目が派手になったくらいだ。）そんな感じの家に炒子は、

「じゃあね！」

と行って入っていった。

次についたのは、エレンの家だった。そしてエレンの家は、炒子の家より凄い。だってお城なんだもん。それはまるでデイズニー出てくるような城だ。転校してきた（エレンは中学一年の時に転校して

きた。(時はこんなに湊くはなかったのだが、しばらくしてから)俺に積極的にアプローチしてきたところから)こんな感じになった。だから、理由を聞いてみると、

「私、結婚したら結婚相手の国に住もうと思っっているんです。」と答えた。

「へえ〜じゃあ、日本の人と結婚するんだ？」俺が聞くと、

「ええ、あくまでも予定ですけど。まあ、予定といってもほぼ決定みたいなものですけどね。それに央太様は日本に居たいでしょう？」

と聞き返してきた。え、何？じゃあ、その結婚予定相手って俺のこと？いや、まさかな。たぶんあれは、一般的な意見を聞いているんだな。うん。そうに決まってる。

「あつ、もちろん、央太様が望むならイギリスで暮らしてもいいですが。」

はい、違っただー。もうそうだよ。俺と結婚する前提でこんな城建てたのか？重い、重すぎる。こんなの断ったら俺どうなるんだろ？といった具合で大変戸惑ったことを覚えている。あの頃は、まだエレンが俺のことを思っているなんて考えてめ無かったからな。我ながらバカな質問をしたものだ。あのせいで俺は一ヶ月くらい悩んじやって夜も眠れなかったし。そんなことを思い出していると、エレンが、

「それでは、さようなら。央太様。」

言って来た。俺も、

「ああ、じゃあな。」

と俺も返した。さて、残ったのは神流だけだ。しかし、こいつと二人きりになるとは、まためんどくさい。だって……

「やつと二人きりだね。央太。」

といって腕を絡ませてきた。そう、こいつは二人きりになるとデレ始めるのだ。普段の態度からは、俺に関心が無いように見えるが、

実はこいつ、かなり積極的だったりする。今も俺に豊かな胸（うぐむ、この感じだとサキユ先生といい勝負じゃないだろうか？）を押し付けながら、かなりはしゃいでいて、笑っている。まあ、最近は二人きりとかなんなかったしな。でも、やっぱり、

「めんどくせー」

と思わずにはいらなかった。そして、執拗に迫ってくる神流をかわしながら家（ちなみに、神流の家は和風な豪邸だ。例えるなら、武家屋敷みたい感じだ。）に届け、俺の高校生最初の週末は終わったのであった。

試験？

あの後、つまり神流を送って帰ったら驚くべきことが起きていた。なんと、光と姉貴達が仲良くしていたのだ。理由を聞いてみると、

「秘密だよ。ねえ。」

「うん。秘密だよ。」

と声を揃えて言ってきた。

へえへえさいですか。

しかし、気にならないと言えば嘘になる。

まあ、どうせ聞いても仕方無いし別にいいか。と考えているうちにそのままその日は終わった。（正確には光がどこで寝るかで一悶着あったのだが、結局は光は本人の強すぎる意思により俺と寝ることになった。）

さて、休日2日目は家で姉貴や真に教えて貰いながら勉強することにして、午後からは、光と遊んで過ごした。

そして、本日試験初日。今日は1日目なので筆記テストになるのだが、不安だ。だいたい試験2日前に試験を伝えられることはおかしんじゃないか！これでいい点とれなくても俺のせいじゃない！

と俺は、早くも自分を擁護し始めた。おっと、そう言えば用事があるのだった。今日は1日目なので筆記テストになるのだが、不安だ。だいたい試験2日前に試験を伝えられることはおかしいじゃないか！これでいい点とれなくても俺のせいじゃない！

と俺は、早くも自分を擁護し始めた。おっと、そう言えば用事があるのだった。その用事と言うのは、

「よし、行くか。光。」

「うん。」

そう、光を預けること。つてことで俺は理事長室に向かっている。預ける先はもちろん、霧さんのところだ。そして、俺は理事長室についた。理事長室に入ると、飛び付いてきた。俺はそれをかわして、霧さんが勝手にドアにぶつかるとまで待つて、要件を伝えた。

「霧さん。俺が学校にいる間この子を預かってくれませんか？」

「ええ〜。でも私子供嫌いだし。」

自分も子供なのに？つて危ない！そんなことを考えていたら、いきなり霧さんが殴りかかってきた。

「今、私、央ちゃんを殴らないといけない気がしたわ。」しまった。忘れてた。この人勘が鋭いんだつた。

「だいたい、その子どもこの子？まさか央ちゃんの隠し子！ちよつと、相手は誰よ！？いいなさい！！そいつ始末してくるから！」

えつ、何この人。もしかして俺が誰かと結婚でもしたらその人殺す気なの？おつと、本題に戻さないとな。

「霧さん、落ち着いて下さい。この子は親父達から預かった子です。そんなことより、この子俺の属性に近い属性を持つてるんです。」

と俺が言うつとさつきまで、元気に騒いでいた霧さんが黙り、息を飲む音が聞こえる。俺の属性を知っているのは、親父達と霧さん、風希と召慈、圭悟ぐらいのものだろう。つまり、姉貴達は知らない。何故なら、俺の属性は知っているだけでかなり危ないし、知る必要も無いからだ。（ちなみに、以前風希がやった空気を操るなどという、普通じゃできない。風希がそんな芸当が出来るようになったのは、俺の属性を知ることになったある事件がきっかけであるのだが・・・今は置いておくことにしよう。）

「それつて、つまり非公開属性の持ち主つてこと？」

そう。非公開属性。その存在自体も知っている人は少ない。そして、それには3つあり、非公開の理由は持ち主が少ないことと、かなりの力を持っていることが原因だ。分かり易く言うと、属性魔法の上位種と言うことだ。

俺が黙って頷くと、霽さんは、

「そう。分かったわ。その子は責任もって預かるわ。」

と了承したので、俺は教室に向かった。

筆記試験は、魔法理論、歴史、魔方阵読解の3つがある。俺は、魔方阵読解以外はぼろぼろで進級出来るか不安に思ったが、気にしても仕方ないので忘れることにした。しかも、俺達は試験のことを知るが遅かったし、仕方がないな。うん。風希もそう思ったのか、いつの間にか元気になっていた。（召慈は頭が普通に良いので問題なし。Sクラス組は勿論問題なしだ。）そのまま、光を迎えにいつて（いつの間にか、光と霽さんも仲良くしていた。どうしたのか聞くと、また秘密と言われた。まったく、女の子は分からん。）皆と合流して極力テストの話にしないようにしながら帰った。

試験？（前書き）

すみません。おそくなりました。

試験？

翌日、とはいっても俺からすれば今日なのだが、今日は実技試験がある。でも実際は学園入って初のテストなので、ぶっちゃけ遊びみたいなものだ。内容は学園内を探索して魔力が込められたボールを障害物を避けながら取ってくるだけである。でも、所属しているクラスによって、とってこなければいけないボールの数は違って、Gクラスは1人一個、Sクラスは1人4個となっている。なお、自分たちでチームを組む（チームを組んでも取ってくる1人あたりの個数の数は変わらない）は自由なので、俺は風希と召慈と組むことにした。正直に言って簡単だ。なんたって俺達の実力はSクラス並みだからな。1人あたり一個でいいなら、十分位で終わるだろう。と俺は考えながら実技試験の説明が行われる体育館に向かった。

体育館では今、校長が話をしている。まったく、このデブの話は本当に長い。もう、すでに話はじめてから30分は経っている。ほんと、聞くたびに殺意がわいてくる。もう、いつそのことやってしまおうだろうか？俺がやるかどうかを考えているうちに校長の話は終わった。ちっ、命拾いしたな。

次は霰さんによる、ルール説明である。内容はさっきいった通り、障害物をくぐり抜けながらボールを取ってくる。人から奪うのはなし。チームを作るのは自由。とまあ、こんなところだ。そして霰さんは最後に、

「なお、一番得点が高い人には、学園に対する願いがある場合、それを叶えてあげましょう。そうね、例えば・・・Gクラスの生徒をSクラスにあげる。なんてことも出来るわよ。」

ちっ。この人今、とんでもない爆弾発言をしやがった。おかげで、真、エレン、炒子、神流の目がキラキラし始めちゃったよ。

「おい、なんかまずくないか？」

と風希が聞いてきた。

「ああ、確かにまずいな。何がまずいって、あのSクラスの女子連中の目がやばい。もう、皆鋭すぎる。あれは完全に獲物を見る目だぞ。」

「本当だよ。絶対震さん余計なこと言ってるよ。せつかく、先生を追い出してまで手に入れた自由な学園生活なのに。こんなことで邪魔しないでほしくないよね。」

と俺に合わせて召慈が言った。

「俺もそう思う。風希は？」

と聞くと、

「そんなの俺だって嫌だ。真面目に勉強なんてしたくないし。」

と答えた。

「じゃあ、やることは一つだな。」

「そうだね。」

「それしかないだろう。」

「「俺達^{ぼく}が一番になるしかないな。(ね)。「」」

俺達が決意を固めていたその頃女子の方では、

「ねえねえ、今の聞いた？」

と真が聞くと、

「そうね、確かに今何か言ってたわね。」と神流が興味無さそうに答える。

「勿論、聞いてたぞ。ようするに私達に一位なれって言うことである？」

「うん。まあそう言うこと何だけど、これで一位になれば……」

「央太様と……。」

「央太と……。」

「「「学園ですつと一緒に居られる!!」」」

そんな感じで盛り上がっていた女子三人を神流は興味無さそうに見ていたが、内心は、

「これは、一位にならないとね。私と央太のためにも。」

(別に央太と神流は付き合っではおりません。)
と思っていた。そして、女子三人に神流は、

「仕方ないから手伝ってあげるわ。」

的なことを言いながら、混ざっていった。そして4人は集まってチームを組み、作戦会議が始まっていた。

一方そのころ、男子チームは、

「うわっ!!」

「うん? どうしたんだ央太?」

「いや、なんか寒気がして。」

「たぶん、またあの子達がまた良からぬことでも企んでるんじゃない?」

と召慈が納得のいく答えを返してくれた。うん、あり得る。てゆーか、それしか考えられない。

「ふ〜ん。じゃあ、何かしら仕掛けてくると考えた方がいいな。」

「十中八九間違いないだろうね。」

と風希の意見に召慈が賛成する。

「しかし、何にせよめんどくさいことになるのは間違いないな。はあ〜あ、めんどくさい。」

俺達がそんな話をしていると、

「それでは、皆さん。試験開始まで教室で待機しておいてください。」

と体育館の壇上から、サキユ先生の声が聞こえてきたので、

「よし、そんなじゃ一つ頑張りますか。」

「うん。」

「そうだな。」

俺達は珍しく気合いを入れて教室に向かった。

教室に帰ってしばらくすると、試験開始の合図がでた。俺達は教室の扉を開けようと扉の方へ向かった。すると、扉はゴツい岩に覆われていた。気付けば教室の外も岩で覆われている。

不思議に思っていると、懐かしの我が担任である、ゴキ先生の声が放送で聞こえてきた。

「はっはっはっは、お前らよく聞け。この扉には、中級古代魔法の『ストーン・ギガ・シルド』をかけた。これは、Aクラス程度の生徒では使えないし、壊せない魔法だ。余計なことは考えず、試験中はそこでおとなしくして、俺をこけにした報いを受けてる！」

はあ？何いつてるんだこいつ？こんな俺達の足止めになるとも思ってるの？まあ、それにしても、

「もしかして、あいつこの機会を狙って学園に来てなかったのか？」

「たぶん、そうだと思うよ。まったく、大人しくしてくれればよかったのにさ、まだ力の差が分かってないみたいだね。」

「本当だよ。ところで風希、早く破壊しろよ。」

「えっ、おれがすんの？」

「当たり前だろ？俺がやるといういろめんどくさいことになるし、召慈はこんなことの為に召喚なんかしたくないだろ？」

「うん。もちろんだよ。」

「いや、お前、結構頻繁に出してなかったけ？」

「あれは、聖霊でしょ。今回は聖獣を出さなくちゃいけないし、さすがにそれはめんどくさい。」

「結局めんどくさいだけじゃねえか！」

「うるせえなー。さっさとしろよ。」

俺が急かすと、

「分かったよ。やればいいんだろやればよ。ちっ。」

と舌打ちをしてから詠唱を始めた。

「じゃあ、すこし離れてろ。『風よ俺の前に立ちはだかる壁を切断しろ。エアースラッシュ』」

と詠唱が終わった次の瞬間、ドアを覆っていた岩が吹き飛んだ。

「なっ、そんなバカな!!」

とゴキ先生の啞然とした声が聞こえる。

まあ、そう思うのも仕方ないだろう。

風希が詠唱したのは初級古代魔法。ゴキ先生が使った魔法は普通はこんなんで壊せる魔法ではないのだが、魔法は使う人によって、威力が変わる。しかし、別にゴキ先生の魔法が弱い訳ではない。そもそも、土の属性魔法は防御に特化している。それでも、このくらいの強度を持っているのは珍しい。いや、ゴキ先生もなかなかやるもんだね。うん。

だがしかし、いかんせん俺らがチートすぎるのだ。実際、ここまで強度があれば、スクラスの生徒でも手をやくだろう。「さて、それじゃ一位目指して頑張るか。」

「うん。そうだね。」

「やれやれ、めんどくさいな。」

そして、俺達はボールを探し始めた。

「今度はここか。」

今、俺達がいるのは、懐かしの第一闘技場。しかし、どっからどう見ても東〇ドームにしか見えない。俺達はもう、かなりの数のボールを集めているのだが、相手はSクラスのため油断は出来ない。そして、ボールはドームの中にある。(ボールの場所は近くにいけば分かるようになっていて)。立ちほだかる障害物は近付くと閉まってしまうドアだ。ただ、ドアが閉まるだけなら良いのだが、閉まる速度が速すぎる。

これじゃあ、身体強化魔法を使っても無理だろう。しかし、電気的属性を纏った身体強化魔法なら話は別だ。

「よし、それじゃあ行ってくる。」

「うん。行ってらっしゃい。と言いたい所だけどそれは、無理っぽいね。」

「えっ?なんでだよ?」

「だって、ほら。」

召慈が指を差した方をみると、Sクラスの女子4人がこちらを見ていた。

「ちっ。鉢合わせしたか。」

俺が愚痴っていると、エレンがいきなりこちらに身体強化魔法を使
つてやって来た。

「央太様、覚悟！」

そして、いきなり殴りかかってきた。俺はそれを身体強化魔法を使
つてよける。

しかし、おかしい。この障害物を突破するには、エレンの力が必要
なはずだ。それなのにエレンは俺に攻撃を仕掛けてきた。周りを見
てみると、風希には炒子、召慈には神流がついて戦っている。そし
て、真はいつの間にか居なくなっていた。

成る程、そう言うことか。ようするに、ここで俺達を足止めしてい
る間に真がボールを集めるということか。となれば、早くエレン達
を倒さなければいけない訳だが、難しい。本気を出せばすぐに終わ
るのだが、ケガをさしてしまう恐れがある。やれやれ、どうしよう
もないな。

風希と召慈の方を見ると、風希はそのまま、召慈は犬型の召喚獣を
出していた。この様子だと、風希や召慈も同じことを考えているだ
ろうし。まあ、仕方ないからここは、ボールを回収しずらかるか。

「おい、風希、召慈任せたぞ。」

「オツケー、了解だ。でも、出来るだけ早くしてくれよ。」

「そつだよ。出来るだけ早くしてよね」

「大丈夫だ分かってるよ。」

俺は風希に返事をしながら、第一闘技場の方に向かった。しかし、

「させません！」

とエレンが割り込んでくる。だが、次の瞬間、風が吹いてエレンの行方を遮った。風が吹いてエレンの動きを止めた後、すぐに風は通り過ぎていって、上から虎が落ちてきた。前者は風希、後者は召慈によるものだ。そして、俺はエレンにできた隙を狙って、ボールを回収しにいった。いやはや、まったくよくやるよ。Sクラスの生徒を相手にしながら、他のことにも気を配れるなんてよ。そのまま、俺はボールの回収に成功して、撤退する準備を始める。エレンの方を見ると、エレンはまだ、召慈が召喚した虎と戦っている。よし、この分だと余裕だな。さて、それじゃあ、

「『水よすべてを流す水流となれ。アクア・スプラッシュ』」

俺は、第一闘技場を飛び出して、2、3メートル上にジャンプしてそこから魔法を使った。俺が詠唱を済ませると、俺の周りから大量の水が出てきて、戦っていた五人を飲み込んだ。俺はSASに魔力を通して水で足場を形成して、そのままいた。すると、風希が風の魔法で、召慈は召喚した鳥に乗って飛んできた。

「たく、やるならやるって言えよ。」

「いいだろ、別に。ちゃんと間に合ったんだからさ。」

「あのねえ、央太、僕たちじゃなかったら逃げられてないよ。」

まあ、確かにそうだな。現に女子3人は飲み込まれてるし。いやはや、さすが幼なじみズの中でも、俺と一番付き合いが長いだけはあ

るな。

俺達はそんな話をしながら次のボールを探しにいった。

そして、残り時間五分ほどになったとき、

「おや？君はいつぞやの天狗君じゃないか。」

天狗君と再会した。天狗君は五人で組んでいてメンバーはみんな女子だった。

「へえー、あんな負けかたをしたのにまだモテてるんだ。」

と風希が驚いたように言う。

「なによ、ー君は調子が悪かっただけよ！！」

と周りにいた女子が言い返してきた。

たく、風希はいつも余計なことを言う。おかげで、

「そうだ、あの日は調子が悪かったんだ。それに君はなにもしてないじゃないか。それにしても、ちょうどいい機会だから、俺は君に再戦を申し込む。さあ俺と勝負しろ！」

なんてことになってしまった。ちっ、確実に無駄なタイムロスだな。

「しゃーねーな。風希。一分で片付ける。」

「はあ！？一分？そんなにいらねえよ。30秒もいらねえのにさ。」

「

「君さ、俺に勝てるわけないのに、そんな嘘ついて良いのか？ああ、成る程。30秒で負けるといふことか。」

と笑いながら天狗君が言ってきた。こいつ、あのときどうして負けたのか理解してないのか？まさか、本当に調子が悪かったただけだとしても？もし、そうならこいつは正真正銘のバカだな。

「わかったから、はやくかかってこいよ、雑魚。」

と風希が挑発すると、

「この前、偶然勝ったぐらいで調子にのるなよ！」

といいながら、向かってきた。そして、いきなり上級現代魔法を使ってきた。そして、人の身長の三倍ほどあるでかい風の塊が飛んできた。風希はそれを、中級現代魔法を撃って相殺しようとした。いや、相殺どころではない。天狗君が撃った風の塊を風希の撃った、風の塊の五分一ほどの大きさの鎌鼬が切り裂いて、そのまま天狗君を襲っていった。切れ味は鈍くしていたのか、鎌鼬は天狗君に当たっても切れることがなく、そのまま天狗君を吹っ飛ばしてしまった。うーん、ハメートル位は飛んだかな？そして、天狗君はそねま床に激突して白目を剥いたまま気絶してしまった。天狗君の周りにいた女子たちはまだ、その状況を呆然と見たままだった。

それから、俺達がボールをもう一個ほど回収したところで何事なく

試験は終わった。そして俺達は今、体育館にいる。

「それでは、実技試験の結果発表をします。」
とサキユ先生の声が体育館に響いた。

待つてました！と言わんばかりの顔をした生徒達が何人かいる。まあ、一位は決まっているんだがな。

「それでは、一位の発表を行います。一学期前期実技試験第一位は・・・Sクラスの北波 圭悟君です。」

Sクラス、といった時点で真達が喜んでいたが、最後まで聞くと驚いた顔をしていた。そして、俺達はそれを見てほくそ笑んでいた。実は圭悟もこちらの仲間だったりする。

実技試験が始まる前に、圭悟に交渉しにいった。

「なあ、圭悟。俺達と組まないか？」

「別に、いいぞ。」

「っ！ありがとう。助かるよ。」

「別に、いいさ。さっき震さんが言っていたことを考えれば来るとは思ってたし。それに、俺は央太達と一緒に行動するわけじゃないんだろ？」

「さすが、圭悟だな。こちらの考えはすべてお見通しか。じゃあ、後でボールを渡すから終了二分前に第二体育館入り口に来てくれ。」

「ああ。分かった。」

という訳で、圭悟に回収したボールを預けて、圭悟が一位になった。なぜ俺達が一位にならないかと言うと、おかしいからだ。Gクラスの生徒が試験で一位を取るなんて、絶対にあり得ない。それはもう、どこからどう考えてもそいつはGクラスじゃおかしい。クラス分けのミスと判断され、違うクラスに移動させられることになる。俺達はそれを避ける為に圭悟に一位はとってもらった。もしかしたら霏さんの狙いは、真達を一生懸命やらせることではなく、俺達に頑張らせてクラスを変えることだったのかもしれない。そして、圭悟の霏さんにする願いもいつてある。まったく、この実技試験では圭悟にたくさん借りを作ってしまったな。いつか何かおこつてやるか。そんなことを考えていると、

「それじゃあ、圭悟君。願いをどうぞ。」

と霏さんの声が聞こえた。そして圭悟は、

「はい。願いごとは……Gクラスの生徒三人、見中 央太、神谷 風希、亜宮 召慈をSクラスに上げることです。」

ええ~~~~~

昇格？

「というのは冗談です。」

と圭悟が訂正する。そもそも、俺達が圭悟に頼んでいたのは、Gクラスの補習をなくすことだ。(ちなみに、Gクラスは基本的にバカの集まりなのでテストの結果がかなり良くないと補習がある。俺達は必要最低限のボールしか手元がないので、補習は確定していたよなものだ。)

「私の願いごとは、先程のべたGクラスの生徒三人をSクラスの生徒と同じように扱うということです。例えば、設備をSクラスと同じにしたり、授業などを本人達が望むならSクラスと一緒に受けることが出来るなどです。」

へえー、成る程ね。さすが圭悟だな。俺達をSクラスの生徒と同じように扱わせることにして、補習を無くしただけでなく、その後のことも自分で選べるようにしてくれるとわね。一つの願いごとでこれまでの結果を引き出すとは、素直に脱帽だな。それを聞いた霧さんは、

「わかったわ。その願い叶えてしんぜよう。」

とノリノリで受け入れた。(てかなんで、あの人あんなにノリノリなんだ？普段はそういう人じゃないのに・・・いや、そういう人だったっけ?)すると、体育館のいたるところから、

「ふざけんな!」とか、「そんなの卑怯だ!」、「お兄ちゃんのバーカ。なんで大人しくSクラスに来てくれなかったの!お兄ちゃ

んなんてだいつきらい。・・・ごめんなさい。嘘です。本当は大好きだから捨てないでー」みたいな感じの罵声が聞こえてきた。最後のは気にしないことにしよう。それに、心なしか俺を見る目に殺意が混ざり始めてきた気がする。そして、その日はそのまま解散となった。

次の日、いつものようにみんなで学園に向かっていると、いろいろなところから視線を感じた。この感じだと、憧れなどのプラスな視線ではなく、嫉妬や殺意などのマイナスな視線っぽい。そして、この視線を受けているのは、俺と風希そして召慈だけだ。何か仕掛けてくるのかと警戒していたが、なにも起こることはなかった。

学園へつくと、教室の設備がすごいことになっていた。ポロポロの机や椅子はなくなっていて、代わりにSクラスで使っているPCつきのシステムデスクが置いてあった。いやはや、これにはさすがにびっくりした。そんな感じで驚いていると、授業開始のチャイムがなった。さて、ゴキ先生は来ているのかな？などと考えていると、教室の扉が開いた。そして、やって来たのは意外なことにサキユ先生だった。なぜこんな所に？と思っていると、サキユ先生が話始めた。

「え」と、昨日の圭悟君の願いごとに従って、あなた達三人はSクラスで授業を受けることができます。受講を希望する場合は私に今言ってください。」

あゝ、そういえばそんなこと言ってたな。

「なあ、風希どうする？」

「えっ、ああ、俺は受けるかもしれない。」

「そっか。じゃあ、俺は受けない。」

「じゃあ、僕も受けない。」

「なんでだよ！？お前達は俺のこと嫌いなのか？」

「「えっ、今さら……」」

「ちくしょう！！」

からかい過ぎたのか、風希が教室の隅で泣き出してしまった。

「悪い、風希。冗談の冗談の冗談の冗談だ。」

「そっだよ。冗談の冗談の冗談の冗談だよ。」

「結局、冗談じゃねえじゃねえか！！」

ちっ、気付きやがったか。まあでも、どうでもいいので、いつの間にか空気になっていたサキユ先生に返事を返す前に質問をした。

「先生、担任の先生はどうなったんですか？」

「担任の先生？ああ、あの人は今日は休みです。それが何か？」

「そうですね。いや、別に意味はないです。それで返事なんですけど、授業は受けません。」

「そうですね。僕も受けるつもりはありません。」

「俺は、受けま・・・せん。」

召慈がアイコンタクトを風希とすると、風希も俺達の意図が分かったようで受講を拒否した。よくよく考えれば当たり前のことだ。そもそも、俺達は自由な学園生活を送る為に頑張ったのだから、授業なんて受けなくて当たり前だ。まあ、もしゴキ先生が授業をするのならSクラスに合流しても良かったのだが、学園には来てないみたいだし授業をする事はないだろう。俺達の返事を聞いたサキユ先生は、少し残念そうに見えた。そしてサキユ先生は、

「はあ、やっぱりそうですね。それにしても本当に圭悟君の言う通りになりましたね。」

と言った。

「へえー、圭悟は何て言ってたんですか？」

だいたい予想はつくが一応聞いてみた。すると、

「中央達は絶対に断るでしょう。でももし担任の先生が来ているならわかりませんが。」って言ってましたよ。」

さすがだな。てか、ここまで理解されてるとなんだか怖いな。

「成る程。でもまあ、なんにせよ僕達は授業を受けるつもりはあ

りませんので。」

と召慈が言うと、サキユ先生は、

「そうですね。わかりました。」
と言って帰っていった。

そして、昼休みがきた。昼休みは姉貴達と一緒に昼飯を食う約束をしているため屋上に向かった。そして、屋上に行くために階段を登っていると、踊り場からいきなり人の身長ほどの大きさのボールが落ちてきた。

「えっ、なんだこれ!!」

俺達は驚きながらも急いで階段を降りていった。

「なあ、あれいったいなんだったんだ？」

と風希が聞くと、召慈が、

「僕が知ってる分けないじゃん。」

と若干起こりきみで答えていた。うん、いったいなんだったんだあれ？まあともかく、

「待たせちゃ悪いから姉貴達のところに行こうぜ。」

「うん？ああ、そうだな。」「そうだね。とりあえず行こっか。」
そして、俺達は屋上に再び向かった。

俺達は無事屋上についたが、つくまでにいろいろなことがあった。まず、いきなり上からカッターが落ちてきたり、火の玉が飛んで来たり、拳げ句の果てには鎌鼬が降ってくるなど様々なことが階段を登りきるまでに起こった。（この学園は四階建てで、一階に職員室や保健室など授業に関係ないものが集まり、二階は一年生の教室、三階は二年生の教室、四階は三年生の教室になっている。階段は十二、三段のぼつたら踊り場があつて、それからまた、十二、三段のぼると各階の教室に行ける廊下がある。）
そして、屋上につくと既に姉貴達が弁当を広げて待っていた。

「悪い、遅くなった。」

「別にいいわよ。それより、そんなに汗かいてどうしたの？」

と姉貴が聞いてくる。さて、どう誤魔化したものか。ところで、なぜ誤魔化すかと言うと、実はさっき犯人の後ろ姿がちらつと見えたのだが、そいつは真達の名前がかいてある服を着ていたように見えた。まあ、その時点で何かはだいたい分かってしまったのだが、まだ確証がもてないので、さっき話し合つて秘密にしておくことに決めたからだ。

とりあえず風希と召慈の方を見ると、二人とも俺に任せるとアイコンタクトで言ってきた。

「いやー、姉貴の飯が早く食べた過ぎてずっと走ってたからさ。」

俺が言い終わると同時に、溜め息が2つ聞こえた。そちらの方を見ると、風希と召慈がアイコンタクトとで、もつとまじな嘘をつけ。とか、相手が余程のバカじゃないとそんなの通用しないよ。とか言ってきた。まったく、失礼なやつらだ。そういうのは、姉貴達を見てから言っしてほしい。ちなみに姉貴達は、

「そんな、てれちゃうな。でも分かったよ。そんなに央君がずっと私の手料理を食べたいっていうなら、私覚悟決めたよ。さあ、それじゃあ、私と早く結婚しよう!!」

とか、

「お姉ちゃんの料理より私の手料理の方が好きだよね？」

とか、

「成る程。央太様はこのような味が好きなのですね。」

とか、

「うーん、私料理はちょっとな。」

とか、

「央太お兄ちゃん大好き。」

などと、様々な反応を見せていた。いやー、しかしなかなかカオスな状況になってんなー。ちなみに、圭悟と神流は何か言いたそうな顔をしている。俺は二人にあとで話す。とアイコンタクトを送り、

みんなをとりあえず現実に戻して昼飯を食べ始めた。

そして、放課後にことは起きた。

ファンクラブ

その後、何事もなく昼食は終了し、教室に戻り午後の授業を受けた。相変わらず、ゴキ先生はこなくて自習だった。俺達は特にする事もないので、無駄話をして時間を潰していた。そしたら、風希がゴキ先生の話題を振ってきた。

「なあ、なんでゴキ先生はクビにならないんだ？」

「あつ、それ僕も思ってた。だっておかしくない？あの人、授業はしないし試験を妨害するし、クビになっても良いと思うんだけど。」

「あゝ、それね。ほらあれだよ。ゴキ先生って血縁重視主義者じゃない？だから。」

「はあ？言ってる意味わかんねえし。」

「あゝ、成る程ね。納得したよ。」

「おい！お前らだけで勝手に納得すんなよ！！」

「ちつ、うるせえな」。分かったよ、説明してやるよ。召慈が。」

「えっ！？僕がすんの？」

「なんだ？嫌なのか？」

「当たり前じゃないか！風希はバカのくせに物分かりも悪いんだから！」

「なあ、それちょっと酷くないか？」

と風希が泣きそうな声で突っ込んできた。あまりにも、かわいそうにだったのだ。

「まあ、風希泣くなつて。お前がバカなのは本当だが、物分かりは良い方だぞ。」

「そうだよ。風希はバカだけど、物分かりは良いじゃないか。」

と俺と召慈が慰めてやると、

「お前ら何かもう知らない！」

と言ってスネ始めた。まあなんつーか、キモい。そして、何かかわいこぶってる気がしてイライラしてくる。とりあえず、イライラを押さえる為に、風希のスネ夫君モードを止めさせようと、召慈に説明させた。えっ？なんで俺がしないのかって？そんなの決まってるだろ？めんどくさいからだよ！

「それじゃあさ、風希。少し考えてみてよ。血縁重視主義者ってどんな人達になる？」

「そりゃあ、良い血筋を持つてる人だろ？」

「そう、正解。じゃあ、この国で実権を握っているのは？」

「それは、良い血筋を持っているやつ。」

「でしょ？ということは？」

「ああ、成る程な。親の力か。」

そう、その通り。親の力だ。実は、魔法学園に勤めることにはかなりのメリットがある。一つ目は、給料が良いこと。だって、人に教えるだけの技量がないといけない訳だから、自然と人は絞られてしまい、少数しか残らなくなる。そうなれば、給料が高いのは当たり前だ。

そして、2つ目は、研究がしやすいということ。ここは、魔法学園だけあって結構立派な設備が揃っていて、さらに給料まで貰えるという研究者にとっては最高の条件だろう。

そして、3つ目は誰よりも早く才能のある子供を見つけられるということだ。学生の内にいろいろな恩を売っておけば、将来その子が有名になった時には何かしらの得があるだろう。このような、利点があるため力のある家は魔法学園に自分の子供を送り込むのだ。

「まあ、でもそこまで力は強くは無いただろうな。」

「そうだね。なんたって、Gクラスを持たされる位だしね。」

「まあそう言うことだ。よし、それじゃあこの話は終わりだ。こんなことを話しても仕方無いし、それに、こんな裏事情知らなくたって良いしな。」

「そうだな。普通の人なら知らなくたって別に困らないだろうし。じゃあ、もつとくだらない話をしようぜ。」

と風希が提案してきたので、俺達はそのまま授業が終わるまで、ずっとただらだらして過ごした。

そして、放課後になった。俺達三人は、みんなが待つているであろう校門に向かってしていると、目の前にいきなりたくさんの人が現れた。俺達が戸惑っている、いきなり現れた人達の一人が言うてきた。

「我らは、真ちゃんファンクラブである。真ちゃんをたぶらかすGクラスのゴミめ。僕らが天誅を与えてやる！」

あゝ、このタイミングで来たか。いや、昼休みに襲われた時から分かってはいたんだけど、まさかこんなタイミングで出てくるとは予想外だった。(実際真のファンクラブは非公式ではあったが中学校のころもあった。そして一人になった時には必ずと言って良いほど襲撃をうけた。)しかし、真達を待たせる訳にはいかないのでシカトして進んだ。すると、

「おいこら、ちょっと待て！」

と声をかけてきた。ちっ、めんどくさっ。

「はあ、何でしょうか？」

と、とりあえずとぼけてみる。

「だから、真ちゃんをたぶらかしているお前に天誅を与えにきたと言ってるだろうが！ー！」

「へえ、そうなんですか。それは立派な心がけですね。じゃあ、頑張ってください。」

と俺が立ち去ろうとすると、

「ああ、頑張るよ。って違うわ！お前に言っただよ。ええいこの野郎、バカにしゃがって。おい、みんなやつちまえー！」

とのりつつこみからの、時代劇のやられ役よろしくファンクラブの会員をけしかけてきた。あゝあ、途中までは確実にいけると思ったのにな。

でも、まあ仕方無いので、後ろに戻ろうとすると、またたくさんのが現れた。

でも、まあ仕方無いので、後ろに戻ろうとすると、またたくさんのが現れた。

「私達は、炒子お姉さまファンクラブです。私達のお姉さまを汚すあなたには、ここでいなくなってもらいます。」

現れた集団の中から女の子が飛び出してきた。俺に言ってきた。てゆーか、よくよく見れば新しく現れた集団はみんな女の子だった。

ああ、成る程。確かに炒子には男らしいときが結構あるからこうゆう、女の子のファンもつくだろうな。

でも、相手は女の子だから余計に相手をするわけにはいかない。(俺はフェミニストなのだ。) 今度は右に行こうとすると、

「俺達は、エレクティアさんファンクラブだ。俺達のアイドルを独占するとは許さん！覚悟しろー！」

と、またたくさんの人が来た。さて、どうするか。左は校舎なので逃げ道が完全になくなってしまった。これが、絶体絶命ってやつだろうか？ 各ファンクラブがどんどん俺達を囲うようにしながら集まってきた。いや、懐かしいなこの感じ。中学校のころも同じように囲まれたことがあった。今のように真と炒子とエレンのファンクラブが結束して。まったく、なんでこんな時に限って結束するのだろうか？ 何時もは、真ちゃんが一番だ。とか、いやエレクトィアさんが一番だ。炒子さんが一番だ。とか言って争っているのに。あの時はそんなことを囲まれた時に考えていたが、そう思っている気持ちは今も変わらない。むしろ強くなっている位だ。そんなことを考えていると、

「あなた達、いい加減にしなさい!!」

と声が響き渡った。声のした方を見ると、霰さんが立っていた。そして、霰さんを見たファンクラブの会長？らしき人達はそれを見て驚いていた。まあそりゃあ、驚くだろうな。なんてったて、全校朝会など以外では滅多に見ることはなく、学園ではもはや七不思議に数えられているような人が目の前にいるのだから。しかし、真のファンクラブの会長？が復活して、

「理事長、邪魔しないでください。俺達はいつに天誅を下さないといけないんです。もし、邪魔するならあなたでも……」

と、途中で言葉を切ってしまった。なぜなら、真のファンクラブの会長？の後ろにいつの間にか、制服をきた三年生らしき人がいて、真のファンクラブの会長？の首筋に電気のできたナイフを突き付けていたからだ。よくよく見れば、ナイフを突き付けられているのは真のファンクラブの会長？だけでなく、この場にいた他のファンクラブの会長？達の後ろにも人がいる。そして、真のファンクラブの

会長？にナイフを突き付けている男が、

「霽様を侮辱すると、我ら霽様ファンクラブが黙ってないぞ。」
と脅しをかけてきた。そのまま、少し沈黙の時間が流れていたら、

「さあ、もう良いわよ。戻りなさい。」

と霽さんが言った。すると、電気のナイフを持った先輩らしき人は、

「はっ！了解しました。」

と言つて男達は消えた。いや、冗談じゃなくて消えた。いくら電気の身体強化魔法を使っているとはいえ、あそこまでの速度をだすのはかなり難しい。俺やエレンなら出来ないこともないが、かなりキツいだろう。それを平然とこなすとはなかなかすごい。しかし、すごいといえば霽さんもすごい。なぜかといえば、自分のファンクラブまで操作しているからだ。こういうのは本人の言うことを無視して行動するもののだが、霽さんはそれを完全に掌握しているからだ。いや、もう凄すぎ。でも、真も霽さんの血を継いでる訳だから、将来こんな風になるのかなーとか、考えていると、

「ほら、そのの三人。理事長室までついてきなさい。」

と霽さんが言ってきた。俺達は何故理事長室に行かなきゃならないんだろうか？とか考えながらも、大人しくついて行った。その間、各ファンクラブの会長？達は呆然とその様子を見つめているだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8017x/>

ええ～めんどくさい

2011年11月10日08時16分発行